

---

# 将来は王妃様？ 連載

はにやえ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

将来は王妃様？ 連載

### 【Nコード】

N0774P

### 【作者名】

はにやえ

### 【あらすじ】

大口あけた瞬間にトリップしちゃった女子高生。なんやかんやと王妃候補にノミネートされちゃうお話です。

いち。餅ついて夢の中？（前書き）

手探りで文書及び、ここの使い方を練習長中です。

なるべく見苦しくないよう頑張るつもりなのですが、初手からやら  
かしましたすみません。

いち。餅ついて夢の中？

…ばちくり。

いただきまーすとソレをお箸で持ち上げて、あんぐり大口開けて対象物に今まさにかぶりつこうとした瞬間、がらりと周りの世界が変わったようだった。

つて、いやいやいや、ちょっと待て私。落ち着いてみよう。うん。

ええと、父方の親族の毎年の集まりで、恒例の餅つきやってたんだよね？

たくさんのもち米蒸して運んで、男連中が交代でついたお餅を片っ端からのしたり丸めたりして鏡餅やのしもち作る傍ら、子供特権でつきたてお餅を先に食べようとおばあちゃん特製の手作りあんこか挽きたてきな粉が散々迷ったあげく結局あんこ絡めていただきまーすしたところだ。

うん。

今年従兄弟の輝兄ちゃんと結婚したお嫁さんの春香さんと、おばあちゃんのおんこがいかにも美味しいかで大いに盛り上がったの選択だった。

今だお店でこの味のおんこに出会えていない。そんな私はつぶあん派だ。

まあ、それはともかく。ついさっきまで、周りには親戚連中がワイワイと賑わっていたはず。

すぐ横には春香さんが、違う横には従姉妹の千鶴ちゃんと千華ちゃん姉妹が、落ち着きない幼い兄弟の優太と幸一とがいたはずだ。

はずなのに、このしんとした暗い部屋は何？  
そして、見知らぬ三人は誰？

と、大口開けたまんま考えること概算三秒。

私が次に出来たことは

「……………」

静かに口を閉じて箸を下ろす事だけだった。

ち、沈黙が痛い。

どうしたものかと固まっていると、四人の中で一番背の高い人が切り出した。

「…私はターシエルクの第一王子、ガラリアと申す。我が国の守り神様はいずれの方が」

しーん

この中で一番背の高い人は王子様ですってよ？

そりゃあ身なりも抜群によさげだけれど。

王子様かあ、うんうん納得。な格好してますよ。

ってか、私を含めて沈黙の三人からすると浮いて浮いてしようがないほどの差があるんですけれど。

他の一人。少年。私より年下みたい？

何やら素朴な民族衣装っぽい格好で、手荷物の籠はやたらカラフルな茸でいっぱい。：蛍光緑のキクラゲって食べられるのかな。

困り顔でもう一人を見つめている。

少年に見つめられている人は：年齢、性別が分かりませんっ！

だって、ダボダボの野良着に深く被ったほっかむりで体型も顔もろくに見れないんだもの！

今まで振るっていたと思われる鍬とセットでこの暗い部屋じゃなくて、お天道様のもと、広大な畑に佇む方がはるかに似合うよ。他に似合いそうな背景思い付かないけど。

そして、餅つきの手伝いで本日ジャージ上下の私。誰もが認める平凡一直線な女子高生。

手には冷め始めたあんころもち。

ええと、神様が何だった？

「喚ばれるのはもう少し先かと思っていたんだけど」

おっと。意外や意外。

自分が神様と認めるような事を言いだしたのは、野良作業中の人で

した。

しかも声が若い女の人。

いいの？神様って言っちゃって。

いいの？神様が野良作業着で。

じゃあ、あんころもちお預けの私と、キノコ満載な少年は何？？

色々ぐるぐる考えているけど、どうにもこうにも現実的じゃないよね。この事態。

何なんだろう？

は。まさか勢いよくかぶりついた餅を咽に詰まらせてただ今気を失って夢の中とか？

正月恒例のニュースのお年寄りを差し置いて先取りしちゃった？

しかも、何なのこの『まるで異世界トリップ』的な夢は。餅、全然関係無いし。

「確かに、本来儀式をする年齢はしばらく先です」

夢の中だからか苦しくないからいいんだけどさ、現実じゃ私、呼吸困難で死にかけ？親戚中揃ってる中、餅吸引する掃除機引つ張り出して大騒ぎしてる最中なの？

と、ある意味現実的な現実逃避している間に、王子様と野良着の女神様？が話を進めておりますよ。

全く私と少年の出番はなさそうですよ。

早く目覚めないかな恥ずかしい。

恒例の餅つきのたびに、正月で集まるたびに、一生言われるネタをこれ以上ひどくならないようにするために、少しでも早く目覚めたい。

「あ、餅、冷めるのもつたいないから食べた方がいいんじゃない？」

おっと、話がいきなりぶった切られましたよ。女神様？たら。そりゃあ、つきたて熱々のうちにいただきたいのは山々だけでも、そこまで空気がよめない子じゃあないですよ。

と、戸惑っていると

「っていつか、ちょっとちょうだいな？」

するりと軍手が脱げた、長い指が餅の入った小皿を撫でたかと思うと、野良着の女神様？の手には同じ餅の話がのった小皿が。

みっつ。

「ありがとう。さあさ、いただきながら話を聞こうか？」

……………さすが夢。餅が手品のように都合よく増えました。

王子様と少年に同じ小皿を配った野良着女神様。

いつ出したのか、フォークでいただくようです。困惑する二人を尻目に、いただきますなんかしているのを見ると、自主的お預けするのも馬鹿馬鹿しくなって、つきたてよりやや固くなりはじめた餅にかぶりついた。

うん。やっぱりおばあちゃんのおんこは今回も美味しい。

「ウルガ王がねえ……」

もぐもぐもぐもぐ。夢の中まで詰まらせてたまるかと、よく噛んで食べてます。皆さんもよく噛んでお召し上がり下さい。

ガライア王子の話によると、この国の王様になるためには、成人した王族が国の守り神を呼び出す事が必須条件なんだとか。

で、代々王様になるために呼び出されている今回女神様なオクナナさん。

代々呼び出す割には三人現れて分からなかったのは、呼び出すたびに神様の姿が違うのだそう。

更に王様継承したら神様の国に帰ってしまうので、ガライア王子も神様を見たのは初めてらしい。

だからって、野良着で現れなくたっても。

今の王様の時は一角獣だったんだって。

何、その落差？分からなくても仕方ないよ。

神様の有り難みが感じにくいよ。

でも、ここにいる他の選択肢で神様って言われても微妙だよな。

ジャージ上下かキノコ狩。

と、ちらっと少年を見る。

奇麗に空になった小皿が手元にある。あんころもちはウケたようで、

何よりだ。伸びる餅に新鮮なリアクションしてました。  
ニンマリ。

「父が倒れたのは去年です。何とか存命中に継承して父も民も安心させたかったのです」

ガライア王子はずっと説明していたので餅は手付かずだ。もう固くなってるだろうな。

しかあし！それでも食べていただきたい！せつかくのおばあちゃん  
のあんころもちだもの！

と、無駄に熱い視線を送っていたら、王子様とバッチリ目が合ってしまった。

に、睨んでいたわけじゃあないですよ？

えへへ、と愛想笑いをおきます。

「で、この者達は何故現れたのでしょうか？」

この者達。私と少年。

知りませんよ？だって夢だし。夢のくせに細かい設定だけど、きつと起きたら忘れるんだろうなあ。

「この子は私の養い子」オクナナさんは少年を見てそう言った。

「ちょっと不安定だね、うっかり飛ばされないようにイカリ代わりに私と繋いでいたんだ」

そしたら私が喚ばれてしまって、くっついてきちゃったみたい。とのこと。

よく分からないけど、少年と女神様は知り合いで、巻き込まれてここに来たっぽい。

じゃあ、私の設定は？

何となくワクワクしながら、女神様のほっかむりを見る。

室内なんだから、UV気にしなくてもいいと思いますよ。ってか、女神様も気にするものなんですか紫外線。

「心当たり、あるんじゃない？」

意味ありげにガライア王子と私を見る女神様。

いいえ、これっぽちもございませんとも？

「なっ！し、しかしそれは八代も前の話でっ」

おっと。ガライア王子の方は思い当たる事がありますか。何やらひどく動揺していらっしやる。

どうでもいいけど、餅、早く食べてみてくれないかなー。もったいなさすぎる。私も本当なら一皿で終わるつもりなんか無かったから、お代わりしたいのに。

さらにじっと見つめる。

するとガライア王子の顔がみるみる赤くなつた！

…いや、顔色変えてないでさ。

「ねえ、早く食べちゃって下さいよ」

つきたてが命なんだから。

「なにっ?!」

何って、あんころもち。

「…私が食べちゃっていい？」すっかり餅食べるぞー！モードになつてた私。

きな粉も大根おろし&なめたけも胡麻も醤油も砂糖醤油も蕩けたチーズに絡めるのも食べたいけど、あんこだけならあと三皿はイケる。初めてする会話らしきものが、自己紹介より『餅食べる』なのはいくら夢だからってどうかとは思いますが？  
しかし！食べ頃を見過ごすのも我慢ならない！

固くするくらいなら寄越しやがれ！と、じつと見る。

「し、しかし…！だな」

ええい、何を戸惑う事がある？あ、あれか。小豆か餅米のアレルギー？

それとも、ありがちな毒味でもしないと食べられないとでも言うのか失礼な。

そもそも、そちらの女神様が出したものでしょうが。何をためらうというんですか。と、女神様に視線を移すと

「うっくくくく、あはははは！」

と、体を『く』の字にして笑っていた。何で？

「改めてまして。あんころもちの提供者、根津 美咲です」

第一印象って、大事だよな。この人達の間で、私はどんな評価されているのやら。あつはつは。

ジャージ上下？食い意地が張ってる？あんころもち？

いやあ、夢の中とはいえ情けないかも。

しょうがないか、夢って訳わかんないもんだし。

「…え」

と、何でそこで戸惑うかな少年。またもや困り顔になってませんか。人の名前聞いてそんなリアクションしないでちょうだいよ。

「……ネズ・キサミ、です」

うん、ゴメン。こりゃそんな顔になるね？

バッチリ同じ訳でもなく、かといってしっかり区別しやすい訳でもなく。

再び沈黙。

「な、名前似ているんだね？あ、ちなみにキサキが名前の方だよ」

ネズ、が一緒だから名前で区別するしか。キサキとキサミ。紛らわ

しい事にかわりないけど。

「この子はいつもネズって呼んでいるから、あなたはミサキってよばせてね」

「わ、私もミサキとよばせてもらおう」

言いながら、やっとほっかむりを取った女神様。  
おおっ、びゅーていほー。

うんうん、それだけの美貌なら女神様もさまになるよ。格好が野良着のままなのがそう思えないけど。

「まだ先と思っで、畑で畝作ってたんだよねー」

神の国で見た目通り農作業ですか。ほっかむりを抱えて照れ臭そうな女神様。

「国を見守る神様じゃあないの？」

見守っていれば喚ばれるタイミング、分かりそうなものだけど」

「…父王が倒れた事に関係するだろうな」

何やら拗ねた様子のガライア王子。いや、会話ののけ者にしたわけではないですよ。

ただ女神様のお顔のインパクトがすごくて。

「そういえば、去年はあまりお手紙来なかったね」

と、ネズ少年。ああ、慣れない、言いくい。

「手紙？父は守り神様に手紙を出していたのですか？」

「あ、神様業務のひとつでね。一応秘密ね。」

ところで、

ミサキちゃん、この一連の出来事、ずっと夢だと思ってるでしょう？」「え」

えええ、何を当たり前な事をおっしゃりますか  
ってか、夢の中でそんな事を聞かれるってなかなか無いなあ。

と、言おうとしたら唐突に

「兄様ーっ」

と、扉がいきなり開いてドレスな少女が転がり込んで来た。  
兄様って事はガライア王子の妹さんだ。王女様だ。姫様だ。

「ティナレア…」

しつぱい顔で迎えたガライア王子。そもそも成人前に儀式をしたというのなら、ここではこの人まだ子供って事だよな。

成人がいくつからかは分からないけど、ずいぶん老け…大人っぽいなあ。

「と、申し訳ございません。儀式も終わり、中から会話らしきものが聞こえるのに、いつまでたってもいらっしやらないもの。待ち切れなくなってしまうましたの」

シユンとうなだれるお姫様。かわいい。けど、展開変わるはもうちょよっと心の準備が欲しかったかな！。

にい。状況確認？（前書き）

お気に入り登録して下さる方がいた事にびびりつつ。  
読んで下さる方に感謝いたします。

にい。状況確認？

ガライア王子の妹さん、ティナレア姫は、見た目ネズ少年と同年に見える。

お姫様にしては、ずいぶんと派手な扉の開け方だったなあ。口調は丁寧でもおてんば（おお古い）なのかも。

そんなティナレア姫が部屋を見回す。

そして困惑。

「え？守り神様はどなたなのですか？どうして三人もいらっしやるの??？」

またですか。

もしかして、これから人に会うたびに三人いる事に困惑顔されるのかな。

っていうか、私だけか。ここにいる設定が不明なの。

いいから早く、目、覚めて！

「だから、これ、夢じゃあ無いってば」

苦笑いのオクナナさん。

…って、ちょい待ち?!

声がおクナナさんな「どこのゆるキャラよ?」的生き物がいますっ。

全体的には…白兔っぽい。  
けど、その凶悪そうなお手々のごっつい爪はなあに？おまけに二足歩行しているよ？

「はじめまして、王女。守り神は私だよ。この子はネズ。私の巻き添いで来てしまっただけなの」

ネズ少年も一緒に紹介。まあ、すごくシンプルだね。

ネズ少年の格好は変わらず…と、思ったら、キノコの籠がなくなっ  
て手ぶらだったよ。どこいった？

「で、では、こちらの方はっ？」

え、何でお目々うるきらさせてこっち見るのお姫様。ほんでもって、  
なぜどもる。落ち着こうよ。事態がまるでわからないままなんです  
が。

どうも疑問形にしつつも自分で答えを出してるみたいに見えるけど。  
嫌な予感がすごくなる。意味不明な熱気に思わず後ずさってしまっ  
つ。

いち、に。

いちにさんッ。

いやいやいや、距離詰めなくていいから！

その、きらっきらした目で見るの止めて欲しいな。なんて。

「ん〜っ、感動ですわっ！憧れの『ミトノーグ王の物語』の再来

ですね?!まさかこのような事態になっていたなんて…どうして早く出て来て下さらなかったの?兄様」

きらきらが倍増しましたーっ。

うん、夢だなあ。訳が分からない。

「はい三回目。夢じゃないよー」

ぶにっ。

と、ほっぺたつままれて、うによっと左右に引っ張られてしまいました。

っ、爪が刺さ…ってはいないけど、今にも刺さりそうで怖っ!これで穴が空いたら、ほっぺたに犬猫のヒゲ跡のようなカサブタこさえてしまうからね?

ほっぺたつねるなんて、んなベタな事、今までの夢の中だってやった事なかったよ!っで、痛い!痛いです!やーめーてー

「いらいいらい、…あにふうんれふか!」

ゆるキャラ兎?神様。

ようやく放してくれたけど、もちよっと手加減よろしくお願いしますよ。

「……………あ、れ?痛い」

「ミサキ、戸惑うのは解るが、現実なんだ君の夢なんかじゃあ無い」

じんじんするダメージほっぺたさすっていると、心配そうなガライア王子が目線をあわせてそうおっしやった。は?夢の中じゃない?

現実？

まさか。『異世界トリップ』しちやいましたあ

なあんて？

あはははは。

この間友達から借りたオススメ本の内容がいくつか頭を過ぎる。  
剣と魔法の世界なんでしょうか。召喚されたっていうなら魔法はあるね。私も使えるのかな。

異世界かあ。これは是非とも記念品をお土産に持って帰らねば。

とりあえず家にはまんじゅうでいいかな。ターシエルクまんじゅう。

…は、無いか。あんこなさそうだし。日持ちがするならクッキーでいいかな。

うーん。見られてる。

きつと頭の中がよそ事考えるってのがバレてるだろうな！。な勢いで皆から見られている。

「えと、これ夢じゃあ無いんですか？」

こっくり。

暗い部屋の中の、私以外の四人は同時に頷いた。

えー私、現実では餅をのどに詰まらせて窒息中ではなくて、親戚一同揃った中で神隠しにでもあっているようです。あはははは、は。

「ミサキ？大丈夫か？」

こんな放心状態の私の何を見て、大丈夫といえるでしょうかアライア王子。

まあ、それくらいしかかける言葉は無いんだろうけど。

「私、何？どうなるの？」  
目の前の王子に尋ねる。

オクナナさんは、この国の神様らしい。お呼ばれた立場だ。

ネズ少年は巻き添いくらったけど、オクナナさんが何とかするだろう。元々保護者なんだし。

じゃあ、私は？

設定何かなー？なんて、呑気に思ってないでとっとと聞くべきだった？

けど、ミスや事故で巻き込みました。帰れませんか、い、生け贄  
だったりしたらどうしよう!?

魔王を倒せって言われても無理だからね?常識的に物を考えて!

…まさかの嫁にとか。

いやいやまさか。そういうんだったらもっと色々スキルあって、見  
目好い子呼ぶよね普通。

無いな。うん。無い無い。

ううう、何でもいいけど(いや、良くないけど)引っ張りすぎだ。  
早いところズバリ言ってしまったてよ。

…理不尽なのは当然文句言いますが。

さあ、さあ、さあ!

びくびくしながら呼び出したご本人の言葉を待つ。

…それでもまだ返事がないのは嫌がらせか。

答えた後、やっついたらタメてから合否言うクイズ番組の司会者か。  
今ならあのステージに立った解答者の気持ち分かる気がするよ。  
おや。また顔色変わって来ましたよ。ほっぺたがほんのりピンクで  
かわゆらしく。いやあ、色白さんだから色が変わると目立つねえ。  
ソバカスとかがあったら目立ちそうだけでも、どこにも見当たらな  
いや。ニキビも無いと来た。

おおお。金髪の人って近づいてジロジロ見る機会無かったけど、ち  
ゃんと生え際から金色だ。おうや、目の色緑なんですな今気がつき  
ましたー。

もう完璧!王子サマなんだよねこの人。姿だけ見せて、何の仕事を  
してる人でしょう?って聞いたら八割王子様って言うだろうね!二

割は役者（配役は王子。王子って職業現実的じゃないから）。  
……黒髪か白髪（回りにそれ以外に染めてる人がいなかったり）、  
茶色い目の人しかいないもんでついもの珍しさにジロジロ見続け  
いでにつらつらとよそ事考えていたけど、いい加減近づきすぎだ。  
すみません。

ってか、本当にタメが長いですよガライア王子様。

今か、今かと待っていたけども、もう「やっぱ言わないで」って喉  
元まで出かかっています。

王子様も、一応言う意思はあるみたいだけど、余程言いたくない事  
なのか口を開くものの空回り。  
パクパクするだけじゃ私には伝わりませんよ声帯使ってください。

相変わらず顔色赤いし、急に具合でも悪くなったんだろうか。それ  
とも、相当口にするのもこんなにも長くためらうほど、嫌な事をこ  
れから言つつもりなんだろうか。

うわあ、冷や汗出てきた。

覚悟不足の為、やっぱ後にしてください。と、言いそうになったそ  
の時、やっと王子様の口が機能した。

「ミサキは、私のシエリクとなってもらう」

「きゃ〜！兄様ったらダイタンですわ！」

……私は頬の血色の良くなった兄妹を眺め

「あのう、『シエリク』って何ですか」

と、ごくごく真っ当な質問をした。

あんだけタメて、説明不足ってどうなんだ！と、おもいつつ。

さん。内容確認？

まだ、魔王と呼ばれる存在がいて人々を苦しめていた頃の話です。

今はターシエルクとなっている場所は、その時、魔王の拠点でありました。

汚れた水しか湛えない川。時折噴き出す、毒ガス。

凶暴でいびつな生き物達。

魔王の拠点は、魔物の拠点。とてもではありませんが人の住める所ではありませんでした。

そんな中、打倒魔王を目標に、悪路を進む一団がありました。

後にターシエルク初代国王となる若者と、その王妃となる娘。そして、それを補佐する魔法使いと騎士。勇者達の四人です。

若者と娘は、魔王に滅ぼされた国々の王子と王女でした。

道のりは果てが無く、困難を極めました。四人は力を合わせ、とうとう魔王を討ち滅ぼしました。

互いに手を取り合って喜びを分かち合っていると、魔王に封印されていた神様が現れました。

「この地に国を造りなさい。そうすれば、私は末永く見守ってあげましょう」

神が力を振るうと、

魔王の城が  
荒れ果てた地が  
汚れた水が

美しい城に

豊かな実りある地に

清んだ水に変わり、人が暮らすのに十分な環境となりました。

王子と姫は喜んで手に手を取り、夫婦となり、ターシエルクをたちあげました。

そうして、ターシエルクの国は王様が代わるたびに、神様により国をつくってゆきます。見守っていて下さいね。と宣言し、神様がそれを認める事で王様に成れるようになりました。

「魔王、いたんだ」

うっわーよかった。こんな時に呼ばれなくて。  
毒ガスも魔物も絶対嫌だ。普通に死ねてしまう。  
想像してぶるりと震えがきた。

神様を召喚するための部屋から、全員でちゃんと椅子と机のある部屋に移動した。

石作りの暗くて冷たい、いかにも儀式するよーな部屋から、立派な応接室に。

「これが約しましたが我が国の起こりです。神様を呼び出すのは、王になるのに必須条件なのは話したんですよね？」

説明会に新たなメンバーが加わりました。

ガライア王子の弟で、ティナリア姫の兄、ガーンム王子。この家は三兄弟みたい。皆さん三人とも金髪碧眼の、オウツクシイ顔立ちでいらっしやいます。

明るい場所で改めて見ると、何と云うか、キラキラしい美形オーラ？がほとばしっていて眩しいです。

うはあ、何か映画のセットに紛れ込んだみたいだなあ。

王子様と王女様とウサギモドキな神様と民族衣装の少年と私。

学校指定のエンジ色のジャージがことさらに浮いていますよ溶け込めない。この景色にウサギより違和感醸し出している気がするよ。

「他にも、絶対条件があるんですよ。こちらとも揃わなければ王にはなれません」

ガライア王子の時よりも説明がサクサク進む。

頑張れガーンム王子。あんな引つ張って、自分達にしか分からん固有名称言っただきりで説明した気になった兄よりも期待するよ。

「兄から『シエリク』になったほしいと言われていましたが…」

そう。ティナリア姫が開け放った扉は全開で、盛り上がる二人？に

呆れながら現れた第三の現地の人。  
ティナリア姫と共に部屋の前で待っていたらしい。  
できれば特攻も止めて欲しかったかな。

部屋から部屋に移動する時に、誰にもまだ会ってはいないので比較  
は私の知っている人達を基準とすると、うちの弟と一緒にくらいかな  
？私より一つ下辺り。

ガライア王子は絶対私より年上だ。と思われる。けど未成年。本当、  
ここの成人設定はいくつなんだろう？

「そもそも『シエリク』とは……」

そう、肝心な説明をしようとした矢先、机の上に唐突にいくつもの  
お皿が現れた。

ホカホカなシチューがよそわれている。  
違うお皿には焼きたてと思われるパン。新鮮そうなサラダ。香ばし  
い香りのお茶。

それがキツチリ人数分。  
広い机の上がお皿でひしめき合っている。

…あのう『シエリク』って、ご飯出す呪文か何かですか？

しい。かみさまごはん？

『シエリク』の説明を受けていた最中。唐突に現れたほっかほかシチューセット。

…美味しそうです。いいにおいで。気が散りまーす。

『シエリク』になれって、ご飯になれって事かしらー？ある意味いけにえ。…冗談ですよ？

「まあ。もうそんな時間になったのですね」

なんかまた自分だけ納得のティナリア姫。こちらは相変わらず置いてきぼりですよ。

「『シエリク』って、シチューセット出す呪文なの？それとも、ここでは定刻になるとご飯が出てくるのが常識？」

とりあえず疑問をぶつけてみる。ご飯になれって思った事は飲み込んでおく。

勝手にご飯が出て来るのは純粹に便利だなーとは思っけど、何も予告無かったから心臓に悪い。

さすが夢。じゃない、ふぁんたじー。何だか気を抜くと話が横道それていくような気がしてならないよ？

「いや、そもそも『シエリク』は初代ターシエルク王妃の名前だ」

疑問に横道それずに答えてくれたのは、ガライア王子様でした。  
なんだ。やれば出来るじゃないですか。説明。

「それにちなんで、歴代の王の女性の伴侶は『シエリク』。男性の  
伴侶を初代王の名前から『タ・ルク』と呼ばれている」

ん？つまり？

「ミサキには、私の伴侶となってもらおう」

は？

はんりよ！？

顔色を変えずにサラツと言ったよこの人。今変えようよ？

え、この人王子様でしょ？王様になるために神様呼び出したんだよ  
ね？

その伴侶って、女王もしくは王妃と呼ばれる存在になれと？

「むっ無し……」

「はいはい、せっかく出したんだから、食べようか？ほっといて  
も冷めやしないけど。即答も無いんじゃないかな？食べながらでも

考えて」

すぐさま断る発言に被せるように、もふめくウサギ神様に遮られた。食べながら考えたところで、快諾出来るよーな内容じゃないと思うのは気のせいかな？

ふと、部屋の外が騒がしくなっている事に気が向いた。何だか、さわさわしている。

外にたくさんの方がいて、動いているような感じ。

「今日は、ターシエルクの建国記念の日なんですよ」と、すでに食べはじめたガーナム王子。いただきます。の習慣は無いのかな？

「今日を含めて、五日通してのお祭りがあるのですわ」

サラダ片手にティナリア姫。

「例年の祭では、この朝食は出ないが、神の召喚に成功すると、この『ルマキ』が現れるらしい。祭の間、国中の人間の元に毎朝な」

と、ガライア王子。

ちよつと。餅を食べずにシチューもとい『ルマキ』は食べるんですか。何なの食わず嫌いな。

『ルマキ』もオクナナさんが出したものなら、あんころ餅だったそ。うだ。元は家の親戚総出の一品だけど、増やした？んだし。

ムツとする表情を抑えるふりすらしないで『ルマキ』をいただく。  
伴侶、なーんて言っというて早くも交流失敗の兆しですよ？王子様。

『ルマキ』は、今まで食べたシチューの中で、断トツのおいしさだった。

ほろほろ煮込まれた鶏肉？も、大きな野菜（人参、玉葱、ジャガ芋  
つばいのその他に見慣れない緑のホックリした野菜があった）の煮込  
まれ具合も完璧で、なめらか濃厚な味わいに多分知らないスパイス  
使ってるんだろーうなーと言った感想しか出せない。グルメリポータ  
ーにはなれないね。

パンもふかかなのと、パリッ&もちっとしたのと。『ルマキ』に  
付けて食べたらめっちゃ合う！

サラダにも見慣れない葉っぱが。赤い小さな実が付いていて、見た  
目も可愛い。単品で食べてみたら甘すっぱくって、味のアクセント  
にもなっていた。最後に香ばしいお茶でスッキリと食べ終わり……  
……食べる事に集中しすぎて考えれなかったよ。ははは。

美味しい食べ物に罪は無いけど、美味しいものにすぐ気を取られる  
ってどうなんだよ子供か！私。

うーん、うーん

「み、見知らぬ人間を国のトップに置くのって無謀なんじゃあ？ほ  
ら、私はこの国どころか、この世界の人間ですら無いわけだし」

うん。練らなかつた割にまともな事言えたぞ。

「だいたい、この国にはティナリア姫以外の女の子がいない訳じゃないでしょう？それらから選べばいいじゃない」

うん。正論だよな？他に女の子がいるんなら。

「確かにいるが…」

「なら！わざわざ他所から調達しないで！手持ちの人材で何とかして下さいよ！地産地消を推奨します！」

異世界限定の伴侶って説は、何か来たのが久しぶりっぽい反応だったんで違つたろうと思つた。

地産地消の使い方が何か違つ気もするけれど、無視だ無視。

「そもそも、私は好きな人じゃないと結婚なんてできません！正室やら側室やらのゴチャゴチャドロドロの女のバトルに巻き込まれるのもごめんです！」

あ、しまったよ。恋人がいるから無理って言えばよかつたかも？

うう、フリー歴イコール年齢の正直さがにくい。

まあ、恋愛結婚に憧れるのは本当のところだけだね。

それでは！ご静聴ありがとうございました！

と、踵を反して部屋から出て行きたい所をこらえて、ふっかりソファーに沈む。

出て行つた所で、行く宛てなんか全く無いし。

それにしても、このソファー。ふつかふつか過ぎてグラグラと落ち着かない。かえって坐り心地悪い気がするのは私だけなんじゃないか？

「王になる条件は守り神に認められる他に、もうひとつあって」

と、ここで真剣な表情から、ややバツの悪そうな顔を作ったガライア王子。

「結婚相手を定めなければいけない」

…うん。そんな気はしてましたよ。

だから、それ私じゃなくてもいいんじゃない？

「…それは、恋愛結婚でなくてはならない」

なんですと？

え？何か私、さっきの発言、墓穴掘ってない？

「ミサキ。私と『恋愛』するのは無理なのだろうか」

ぎゃ~~~~~?!

無駄にキレイな王子フェイスを悲しげにさせてそんな台詞吐いてこっち見ないで下さいよ?! 心臓に悪いです! じ、寿命が縮まるっ!

お、落ち着いて!

状況を確認するんだ、私！

目の前。私に伴侶になれと（しかも恋愛しろと！）すごい無茶を言うこの国の王子様そのいち。

その横に、さっきの私の墓穴発言から、さらにキラキラした目で見つめるティナリア姫。テンション高め。

反対の横に、落ち着いた表情の第二王子様。どうでもいいのか？

私の横にはネズくん。さっきからというか、最初から大人しい。空気読めてる。弟や従兄弟はこの年齢の時ってもっと騒がしいもんだっただけ。まあ、比べるのがうちの親族だしなあ。

その横に、ウサギのままのオクナナ女神様。あの爪でとっても器用にスプーン使ってたなあ。ぬいぐるみが食事してるような光景だったんで和んでしまったよ。

机の上、さっき食べ終わったルマキセットの空のお皿やカップが全部無くなっていた。

片付け要らずですか。至れり尽くせりですねオクナナさん。

…状況確認に失敗した模様です。

「お。乙女達の暴走？」

神様に見守られた国、ターシエルクに住む年頃：ではなくても、未婚の娘は、いつ何時も自分の名前が刺繍されたハンカチーフを所持していて、必要な時にすぐ出せるようにしている。

これは、ハンカチを持ち歩く事が礼儀だ。とかいう当たり前な訳ではなく、ましてや刺繍が乙女の嗜みだからという訳でもなく。

「実績があるから。ですわ」

と、ティナリア姫。

何でも、いつかの王様が王子時代に怪我をして、通り掛かりの村娘さんが手当に使ったハンカチが美しく刺繍されていたんだそう。

惜し気なくきれいに刺繍されたハンカチを怪我の手当に使った事がきっかけで恋に落ち、その村娘さんは王様となった王子のシエリクになった。

それで終わるなら、何て素敵なシンデレラストory。だ。

それ以降の時代には、その王妃にならって、いついかなる時も怪我をした王子様にハンカチを貸せる様に、乙女達はハンカチを持ち歩く。

自分の名前入りという、自己アピールも忘れない。

だからこそ、小さな怪我もウツカリ出来ない。と、ガライアとガ-

ナム両王子はため息をつく。

こんなような話はごろごろあって、過去に自然と恋に落ちた王達のすべてを乙女達は真似るのだそう。そう、すべて。

先輩のイジメにあって、夜こっそり一人泣く新人侍女のキヨラかな涙に恋に落ちた。

なんてのを真似された日には、軽々くホラーになるので謹んでもらいたい。

…夜の人気の無い城のあちこちから、睨り泣く若い女の声が！

うん。どう頑張っても怪談だ。

ちなみに、王族達がまっ先に覚えるのは治癒魔法だそうだ。

看護婦さんが、小さなすり傷にハンカチを巻いた時、何が何でも覚えると誓ったそう。

お仕事しようよ。看護婦さんよ。

王達の恋は、庶民にとっては娯楽で、この先の対策としての情報源でもあるのらしい。大変なことだ。

国中の女の子が、シンデレラを真似てガラスの靴を落として行くよ  
うなものなのかな？

前と同じ事をしたとしても、そこからうまく恋に発展するとは限らないと思うんだけどなあ。

そこを、けなげと感じるかどうかは受け取り側次第なんだろうけど、そんな事が同時多発で長いこと続いちゃあ恋心どころか湧くのは警戒心だよ。

えー、ただ今ワタクシ、ターシエルクに置ける年頃の乙女達の行動を聞いております。

夢見る乙女！の微笑ましい努力も集団となると引かれます。

イヤコレ、単品でもどうなの？

続くけっこうな迷惑行為のせいで、女性不信になっているっぽいこの兄弟。

「兄さんも、やらかしたよね」

と、ガライア王子をじと目で睨むガーナム王子。  
うんうんと、同意のティナリア姫。

「え、何？初恋バナシ？」思わず身を乗り出してみた。なんだー恋してんなら私がいなくてもいいじゃないか。

あ、実らなかつたりしてちゃあ突っ込んでいけなかつたかな。

「違う！そんなのではない…」

即座に否定された長男王子様。

小さな頃の話しだ。と語りだす。

ほんの小さな、もの心ついた頃。おやつに出されたケーキが焼きた

てで、ふくふくと良い香りを放っていた。

それを、いいにおい、とか、ケーキ大好きとか、子供らしく誉めたらしい。その時居合わせていた侍女が聞き付けて、以来、王子様の気をひく為にバナラの香りをまとわすようになったとか。そこから情報が伝わり、ついには国中の女の子が。

おかげで匂いに酔ったりして、甘いものをすぐに食べられなくなつたとか。か、可哀相に。

ええええ、ちょっと待ってよ。その発言をそう取るか？小さな子供の、そんな発言がそうなるの？

思わず、うへえと顔をしかめる。王子業務も大変だ。  
あ。

「だから、あんころ餅食べなかつたの？」

説明していたというのもあるけれど、それ以降も手に持ったまま。

すっかり硬くなった餅を見つめてみる。みんなで食べていた時、ネズ君が伸びる事と、甘い事に感心していたので、あんころ餅が甘い事を知つたんだらう。

食わず嫌いめ。

もう伸びはしないだらう餅。

ああん、もつたいない！

そりゃあ未知の食べ物に口にするのは勇気がいるかも知れないけれど、焼き菓子とは全然違う味だし、ためらうほど見た目が悪いもの

じゃない、はず。多分。甘い全般がダメならしょうがないか。うう、一口だけでも挑戦してみない？

「確かに甘い物は苦手だが」  
じっと手の中の皿を見つめて

「これは平気そうだ」

と、許容範囲宣言。

まあ、間違ってもバニラやバターの香りはしませんけどね。…あんことバターって意外と合うんですよ？バターどら焼きとか最高！…個人的意見。

しかし、大丈夫そうならなぜ食べない？

「ルマキは、色々特徴があるのだが、その一つに『現れてから、与えられたの人が何か他に食べると消えてしまう』というのがあった。

あの部屋では時間を確認できなかったの、アンコロモチを一人で後から食べている最中に時間がきてルマキが現れると、すぐさま消えてしまう。ルマキを食べるのはターシエルク国民の権利であり義務。

そうなると困る事になると判断して後に回させてもらった。…甘いからってだけで手も付けなかった訳ではない」

あら。食わず嫌いじゃ無かったのか。そりゃ失礼。  
でもなあ。食べ頃逃してるよー。

「さつきから気になっていたのですが、アンコロモチ、ですか？それ。ルマキではなくて」

こちらは興味深々な姫。

ガライア王子の手の内にあるお皿に釘付けのご様子。

「ってか、ガライア王子と私だけだよな？お皿持ってるの。オクナナさんとネズくんは置いて来た？」

「ああ。ミサキがこちらに来た時に持っていた食べ物で、アンコロモチというそう。柔らかくて、長く伸びていたぞ。味は甘いらしい」

見聞きした事を、妹さんに伝える優しいお兄さん。  
けどね、もうあんなに伸びないと思う。

レンジがあれば…あれは水つけなきゃあだし、焼くにもアンコ絡めであるからアンコが焦げるだろうし、ぜんざいにするにはアンコが足りない…ああっ！美味しく食べさせるにはどうすれば？

「…固い？」

と、ハラハラと見守る最中にも食べ始めた王子様。

「ごめんね、あの、みろーんと伸びる面白い食べ物では無くなっていくんだよ。」

「かじれるけど、食べれるけど、何だかとっても残念だ。」

「よかったら、こっち食べる？」

と、またまた餅を出したオクナナ女神様。  
ターシエルク王族三人分。

時間が経ってるようには見えない、柔らかかそうなあんころ餅。

「いや、こちらをいただきます」

「私はいただきますわ!」

固い餅をよく噛み砕いてガライア王子。

ティナリア姫とガーンナム王子は新しいお皿に手を伸ばす。

そのうち、甘くて、みろーん。と伸びる餅に良い反応を示す兄妹に  
何やら知らない達成感が沸き上がる。

ガーンナム王子も甘い焼き菓子は苦手だったようだけど、これならば  
食べられる。とのこと。

いや、無理に食べなくていいんだよ。出したの神様だから断りにく  
いだろうけど。それにしても、よく考えたら、食べる直前だったよ  
ね。

それを増やした? って…いや、口は付けて無かったけどさ。箸は付  
けてたし。何か嫌だなあ。今さらだけど。

「大丈夫。コピーしたのは『盛り付けて10秒後』の状態だから、  
ここに来た時より出来立てだし箸も付けてないよ」

得意先なウサ女神様。

「なんですかその、後からの録画かドライブレコーダーみたいな魔  
法? は。もう、便利すぎでしょ。てか、心よまないで下さいよ」

グツタリと疲れました。ツッコミで。  
こんな疲労感は初めてですよ。

…小学生からの友達、幸恵ちゃん。お互いに「カレシが出来たらきちんと報告しよう」なんて言ってたけど

カレシでも恋人でもなくて、すつとばして初対面でいきなり求婚された場合の報告って、必要ですか。

…要りますかそうですか。

まあ、帰れるかどうかの超重要な事柄を聞いてないから、今のところ報告は脳内でのみですが。

はあ。魔王を倒せ。なんてのも最初から無理だけど、こういつのつて何で無茶苦茶な事言うんだろ。

『晩御飯のメニュー決まらないから、今、自分が何を食べたいかアンケートに答えてよ』

くらいの依頼にならないもんかな。本気で。

ろく。心、ひかれる？

何だか、話を聞こうとするたびに食べ物に気を取られている。  
絶対気のせいじゃなく。

そらされる前に、聞きたい事をまとめておこうか。うん。

そのいち。ガライア王子は王位を継ぐために結婚しなくちゃいけない  
くて、しかも恋愛結婚限定らしい。

……………それを、よ、よりによって私と、と言ってくる辺り、理  
解不能にございますることよ。

あんだけ顔がよくて、ちょっと話したただけで性格よさそうで、  
王子やってるくらい家柄バツチリ なんだもの。

群がるハンター達もいるけど、ちゃんと恋する乙女ちゃんだってい  
るはずだ。と思うよ？

ああでも、主張しないと気付かれなくて、変に主張するとハンター  
と一緒にたにされるよなあ。

そんな難しいさじ加減が、ただの恋する乙女ちゃんに出来るものな  
のか。

見極めるの難しそうだなあ。対象はいっぱいいるだろうし。

それにしたって、私は無いでしょ。この王子サマには釣り合わない。  
何の冗談なのかと。

第一、恋愛したこと無い素人に荷が重過ぎるよ！

に。私は帰れるのか。

帰れるなら、まだいい。

根津家の親戚は今頃パニックだろうけど。

帰れなかったら？

ガライア王子と恋愛：するしかない？

しなくても生活保証はしてくれる？

ほら、召喚者特約みたいなの。こちらは被害者な訳だし。

さん。そもそも、何で『恋愛結婚』なんだろう？

王族貴族って、政略結婚当たり前の世界じゃあないのかな。

それをわざわざ、限定してまで。

家柄とか格式とか、色々あるだろうに、村娘とか侍女が王妃になつて嬉しいしね。

それで回りは納得するの？

絶対苦労したと思うよ、その二人。

とりあえず、そんなところか。

考えがまとまった所で、顔を上げる。と、何か全員の注目を浴びていた。

え、そんなに考え込み過ぎてた？

「えと、何か？」

あんまり話が食べ物に中断されてて、ゴチャゴチャしてるから纏めてただけじゃん。

寝ていた訳じゃ無いですよー。

と、言ってみる。

「まあ、いくらルマキが現れたからとはいえ、まだ早朝。眠いのは仕方が無いでしょうね」

あの、だから違っつてゲーム王子。

ん？

「早朝？」

部屋から部屋への移動中、誰とも会わなかったし、外も見れなかった。

廊下の明かりは蛍光灯とも、ランプとも違いそうな、光る水晶玉みたいなのが等間隔に置いてあった。この部屋もそう。窓が無い。

「私、さっきお昼前くらいだったと思うんだけど？」

餅搗きは朝から集まって準備して、お昼頃に出来上がる。

そこからぶち宴会モードに入るわけだけど、まあそれは置いておく。

「ルマキが現れるのは、朝の五時ちょうど。起きている城の者も今頃食べ終わり、神が現れた事を知っただろうな」

座りながら、時差を体験しちゃったらしいよ。

海外旅行行った事無いからこれまた初体験。

実感無いけど！

「実は皆、徹夜なんですの。昨夜からずっと起きて、兄様の儀式の結果を待っていたのですわ。兄様は儀式で徹夜ですけど」

え、その年で徹夜ってキツくない？試験前の一夜漬けでも、少しは眠らないと私、もたないのに。

ってか、妙にテンション高いのって徹夜のせいだよな？健康に悪いよお姫様。

「今日は、無事に守り神様も来てくれたし、いつもの祭以上に忙しくなるね。キツイなら仮眠とっておいたら？」

いえ。全くお気になさらず。目は覚めてますとも。さすがに真昼間だったし。

「いや、儀式で神の娘が現れた場合、国に馴染んでもらう為に祭に参加するのが決まりだ。発表はその後となる」

「ほうほう。五日間、遊び歩くのがとりあえずの仕事と？」

そりゃラッキー。ずっとそれでいいよ！

「違うでしょう。儀式や式典に参加するんですよ」

き、厳しいよガーナム王子さま。

冗談だよな？そんな重要っぽい役割へろつと任せないですよ？

「いや、あくまで一般参加だそうだ。身分を伏せてお忍びで参加させる決まりらしい。案内は私がしよう」

あのー。ガライア王子、アナタ面が割れてるんじゃないあ？

一般参加なんかして、城下街がパニック起こしたりしませんかね？するよね？

そんな台風の目玉に案内頼むのは無謀だと思われませんか？

あ

「流される前に質問！」

シュバっ！

バツチリ拳手してます。こうでもしなけりゃいつの間にか『ターシエルクわくわく観光プラン』王子様と一緒に『が立ち上がっていきうだ。

「はい、ミサキちゃんどうぞ」

ぽにっとした足を器用に組んでオクナナ神様。視界に納めていると気が抜けます。

「私、元の世界に帰れますか？」

一番重要な事を聞いた。

役割を聞くより、先にこつちだろうと今さら思う。

いや、当たり前前に覚める夢だと思っていたしね？

「帰れるよ」

「「守り神様！」」

アツサリと帰宅可能宣言がなされました。しかも、神様保証。

うわあ、これほど心強い事ってないよね？！

ガーナム王子とティナリア姫は秘密にしておきたかったのか悲鳴が上がった。

ん？ガライア王子は？

「ただし、条件がある」

冷静にガライア王子。条件かあ。やっぱりねー

「一つは、いますぐに帰る」「今すぐ帰るコースでお願いします！」

何だあ。もー、驚かさないで下さいよー。

「…最後まで聞いて貰おう。この場合、元に戻るとここで過ごした時間の五倍ほど経過した場所に戻る事となる。

話によると、この儀式で出来た『縁』が続き、たびたびこちらに来

る事になるのだが、時間は分からなくなる。

ミサキが戻っても、いつ何時こちらに召喚されるか、こちらも指定は出来ず、還す時間もまちまちで、帰ったら流れている時も違ったりし」

……… けっこうな時間、たってるよね？

け、警察のお世話になってる？ ねえ、なってる？

「二つ目は、三ヶ月から半年ほどこちらに滞在。のちの送還だ」

どう違う？

「私の術や、国に馴染み、調整をする。馴染めば誤差は十分の一秒にも満たずに元の位置に返せるだろう」

…ほほう。それはすごいですね？

それなら回りにミッチリ人が居ても気付かれないかも。気付いたとしても、まさか「今、消えてた？」なんて質問来ないだろうし？

「『縁』の召喚も、双方の都合で出来るはずだ。定期的に来てもらう事には変わりはないが」

長くて半年コースのほうが、後々が楽？  
でもなあ…

「いきなり半年も、余所の家に泊まる事になるのはちょっと遠慮したいなあ」

「あら！ 兄様のシェリクですもの。国をあげての大歓迎ですわ！ 早

速部屋の手配をいたして来ますっ」

「えええ?!だから遠慮したいんだってば…」

暴走姫になるのを止められませんでした。

ティナリア姫は、風のよーに去って行ってしまった…

「衣食住は保証します。自分の家と思って滞在して行って下さいね」

(必要経費ですから)って、聞こえたよーガーンナム王子。

ガライア王子と『恋愛』しなかった場合、返金求められそうで怖いです。

しかも、利子ついてそう。

これからかかる経費の申請をしてきます。と、

風のよーに。では無いけれど、ガーンナム王子退場。

返せと言われても返せないからねー？

「朝ご飯が和食でないと…」

だんだん言い訳が苦しくなってきた。

「はい」

ドン!と、応接机に乗ったのは、米俵、味噌樽、醤油瓶、昆布、鰹節、煮干し、干し椎茸、梅干し壺、みりん瓶、料理酒瓶、魚の干物、色々な調味料等々。

どっから出したのかを突っ詰めばいいのか、有ること自体に突っ込

めばいいのか、しばし、悩んだ。

何でもアリね？神様。  
応接机が重そうだよ。

「帰ったら勉強が分からなくなったら困るし…」

「滞在期間中、私がみてあげるよ。来年の受験にむけての対策もバツチリ！にしてあげよう」

見れるの？！勉強教えるの？神様が？

「帰ってからの定期的な行き来も、火曜、木曜の午後八時にして、私が家庭教師に行くって事にしようか。勉強ももちろん見るよ」

うおおおい、日本に来れるの？

しかも、やけに具体的プランだね。本当の習い事みたいなスケジュール。

ああ、そうですか。「神様だから」ですか。

まさかそのウサギの格好で来ませんよね？

謎の生物あらわるって、ローカルニュースになっちゃうよ。かといって、あんな綺麗な人が来てもらうのも、ご近所ニュースくらいにはなるだろうけど。

「ミサキがここに居る間、神の娘として、オクナナ神様が後見人となる。

それは後に神殿に代わるがな」

オクナナさん、お母さんですか。神の娘？あははは。ご大層な事で。

「ねえ、僕はどうしよう？」

ずっと黙って聞いていたネズくんが、さすがに聞いてきた。

そっこだよね。保護者が一緒とはいえ、私より年下だもん。不安になるよ。

「んー。しばらく私はこっちにいるからなあ。いい機会だし、色々間なんでおくといいよ。人が大勢いる所は久しぶりでしょ？」

ガライア王子、ネズの滞在する部屋も用意してもらえる？私は何時も通に適当に過ごすからさ」

「承知した」

オクナナさんは、儀式で呼ばれても神殿（神様らしくあるらしい）に：行ったり、お城をウロウロしたり、街をフラフラしたりして過ごすらしい。

きちんと神様が滞在する部屋もあって、そこも利用はしているみたいだけど。

「人がいっぱいいるからね。精霊や妖精にない知識と技術を得るといいよ」

あのおう、ネズくん普段どんな生活を？

「同じ年頃の子とも、友達になれそうだし」

そっか、回りは大人ばかりなんだね？

ネズくん、ちょっと嬉しそう。

「そうそう。この国、温泉がいっぱい湧いていて、お城のお風呂は源泉掛け流しの入り放題なんだ！楽しみにしててね！」

私が長期コースを選んだのは、温泉につられた訳ではアリマセン。ええ、きつと、おそらく多分。

なな。お約束？

ひとつ。ここにいる間、日本の勉強と同じ時間をターシエルクの勉強に使う事。（早く馴染むために。\*ターシエルク講師は別に用意）

ふたつ。ガライア王子と一日一回は一緒に食事とお茶をする事。（これも早く馴染むため）

みつつ。規則正しい生活をする事。（不摂生は許しません）

ターシエルクに長期滞在コースを選んだ私に、オクナナさんが課した事はこの三つだった。

三つ目：何だか休み前に貰ったプリントにも同じような事が書いてあったような気がする。

休みに入った途端守れてなんかなかったけど。

そして守れる自信がアリマセン。

部下を紹介すると言われ、その人を見た時の衝撃は、ちょっとやそつとじゃ忘れられない。きつと、体も一瞬強張ってしまっただろう。そして、その事は回りにバレていたと思う。

「この者達は、信頼していい。私の友人、兼、部下でもある」

ガライア王子の声も耳の上をつるーっと滑っていく。  
おっとと。ええと、信頼できる人達ね？よしよし。

さっきの応接室からまた移動。

その際、私は柔らかかシューズを装備した。

…今まで靴下だったんですよ。

『神の子供』が、どのような状態で現れるか不明な為に、応接室には衣装一式があった。フリーサイズで柔らかか靴はブカブカだ。  
他にも、治療キットや解毒剤、毛布、解術セットなど……解術は何。最初の部屋に置けばいいのにと思ったらあの部屋は、不正防止のため何も置いてはいけないみたい。

あの部屋は、王族と、神様と、現れたなら『神の子供』しか入ることが出来ないらしくて、部下の人達は境界ギリギリで待っていた。  
この人達も徹夜なのかな？大変だなあ。お疲れ様です、ルマキは食べましたー？

相変わらず、予定人数より多く現れた私たちに戸惑い…はしなかった。ティナリア姫とガーナム王子が説明していったらしい。

「初めまして、ミサキ様。守り神様の神官を勤めております、セスと申します」

うわあ。青い髪って、ナチュラルにいいのかこの世界。

肩よりちょっと長い程度の瑠璃色の髪を一つにくくっている。白と水色の、ゆったりした服は全体が寒色系なくせに本人の柔らかな雰囲気。ピッタリで、多分オクナナさんを奉る神官服なんだろう。ロン毛が似合っちゃうところがすごい。

「我が国に伝わるオクナナ様の伝承について、セスの右に出る者はいまい。詳しく聞きたいなら彼に聞くのが一番適任だ」

本人がここにいるのに？と思ったなら、断られてしまった。

「私の認識している守り神や神話と違う事もあるだろうし、まずは神官から聞くといいよ」

本人（？）がそう言うんだったらしょうがない。お世話になるう。

「初めまして。根津 美咲です。オクナナさんの事を初め、何つにも知らないに等しいので色々教えて貰う事となるでしょうけれど、物覚えは良くないのでそこところは勘弁して下さい」

ぺこり。

いや、スルスル覚えられる自信なんか無いから、期待されても困るので先手打っておく。

『神様が連れてきた特別なひと』だなんて、なーんでも出来ると思われてもしょうがない？そんなチートな能力なんか私には無いから。

あつたらテスト前に必死に苦勞する事無いよねー。ええええ、コツコツ覚えるタイプでもござんせん。しかし、横にいる人の（神様の？）事を他の人に聞いて、神様からは高校の授業内容見てもらうってどうなのよそれ。

「私を始め、ここにいる者全てがライア様のシェリクが現れた事、この上ない喜びを感じております。よくお越しくださりました」

ニコニコと、爽やかさ満点の笑顔で好意的な事を言っているセスさん。

つて、ちょっと！

「あ、あの、シェ『シェリク』は、まだまだ保留という事にしといて下さい」

すでに決定事項？ねえいつ誰がエンターキー押した？…ティナリア姫あたり？

決めたのは、滞在することであつて、よよ嫁……コホン。『シェリク』になることじゃあない。

すっかり否定しないと、明日には花嫁衣装が用意されていそうで怖い。

「おや。ミサキ様はずいぶん謙虚なんだなあ？」

いやいや、日本人の名物？無駄な遠慮や謙虚さから言ってる訳じゃない。

心の底から遠慮しているんですよ！

だいたい荷が勝ちすぎるよ。いきなり初対面の王子さまと恋愛さあしるつて言われても出来ません。

他の人なら出来るもの？

だとしたら、他の人連れてきてよ。明らかに入選ミスだから！

何て事言い出すんだ。な、人は、いかにも騎士な格好をしていた。お腰に剣を装備してる人なんて、映画村くらいでしか見た事ないや。あれはお侍さんで、模造刀だったけど。

「はじめまして。ガライア様の（仮）シェリク、ミサキ様。近衛騎士のエンジユと言います」

カツコ仮。仮かぁ。まあ、付かないよりいいか。

騎士のエンジユさんは、高身長でガツシリしているので迫力がある。でも、威圧感ってほどじゃあないのは表情が柔らかいせいかな？ 後、明るい茶髪がこの三人の中では日本でまだ見かける色味で、親近感がわいてくる。

「こんなに可愛いシェリクが来て、ガライア殿下がうらやましいなにかっ！

「そうですか。ありがとうございます」

へらっ

あはー、お世辞言われちゃったよ。しかも早速カツコ仮外しやがったよ。

なんだこの人、イタリアの人か？

と、日本人のお得意な曖昧笑いをへらりとかます。

まあ、美人か、可愛いか。の二択だったら、可愛いって言うておいた方が無難だよな。

可愛いの前に『愛嬌があつて』とか、『ぶさ』とか色々つけられて

ごまかし出来るし。美人なのは、純粹にウツクシクなくちゃあ、そうとは言えない。と思うんだけど、一般的にはどうなんだろ？

ほんでもって、三人目。

「魔術師の、カナギだ。この国は他の国と比べて数は少ないが、余所の国の魔術師よりも遥かに優秀だ」

ええと、井の中のくでなけりゃいいね？

本人に対してかなり失礼な事を思いつつ、冷静に、冷静にと自分に言い聞かせて三人目と向き合った。

「初めまして。魔術師のカナギと申します。ガラリア王子の（仮）シェリクが現れた事、心よりお祝い申し上げます」

カツコ飯をキツチリと付けてくれたカナギさんは、何と銀髪&真っ赤な目。

セスさんとエンジュさんはよく見え無いけど、暗い色みたい。

カナギさんのお肌は異様に白くて、目が赤い事が凄く目立つ。あと、クチビルも不自然なくらい赤い。何か塗ってる、訳ではなさそうだけど。

エンジュさんがこのメンバーでは一番色黒かな？よく日に焼けてます。

二番目がネズくん。お外でよく遊ぶのかなあ？きのこ狩りをするくらいだし、アウトドアはお手の物なのかも。

そんなネズくんの髪は黒っぽい。ショートカットでサリサラ。

アジアのどこかにある、少数民族イメージな格好で、大人達をじっと観察しているみたい。

…えー、はた目にも私よりもはるかに落ち着いて見えます。その辺で凹んでいいですか。

さらに言うと、こっちに来てから今のところ会う人全員美形なのは嫌がらせか何かですか女神様？

そうだよネズくんも三人の部下の人達もそれぞれタイプの違う美形だよ！

全くもってお約束すぎる。自分の平凡顔が浮きまくるよ。ただでさえ、ジャージ上下っただけで妙なのに。

えー、ガライア王子が甘い王子様フェイスでしょ。ガーンム王子が顔立ち似ているけどクールタイプ？

セスさんが爽やかお兄さんで、エンジュさんがワイルドお兄さんで、カナギさんが中性的びぼー…

後は何だ？

ネズ君が年下で可愛い弟担当？でも落ち着いててどっちかっていうとカッコイイ。可愛い担当はティナリア姫かな。かなり弾けているけれど。

綺麗なお姉さん&マスコットを兼任しているのがオクナナさんで。てか、何でうさぎに変身したんだろう？

後はヤンチャな同い歳やら、メガネの怖い人とか、女の子にしか見えないような男の子とか、渋いオジサマとか出て来たら

出て来たら

「っ、すいません。ちょっと席を外してもいいですか？」

あんまり見てもいい加減失礼だろうと、ふいつと視線を外してさりげなく退席の許可をいただこう。  
思い切り………えれるように。

え？すでに十分不自然？小さな事は気にしない！

「お手洗いですか？ご案内致します」

うはああ、カナギさん違います。しかもあなたから一番離れたかったのに……！

まあトイレなら個室だから、入ったら一人になれる。それまで我慢しよう。

「お願い、します」

そのまま道なりに進んでゆく。さすがの長い廊下。

すたすたすたすた

うーん、長い。地下鉄の駅でトイレ探してる気分だ。案内人いるからいいけど、こんなに広いと大変だ。

今の用事が本当はトイレじゃなくて良かった！ここは案内板無いしね。

すたすたカチャ。

とある扉を開けてくれて、どうぞと示されたので中に入る。他の扉も似たようなものなので、すんごく区別つかないんですが今後どうしましょ。って

「カナギさん？」

案内された扉の中は、トイレではなさそうだった。

明らかに使われていない部屋。シーツかぶった家具が置かれている。

「今、結界を張りました。この部屋の音は、外に漏れたりしません」

うおおおい、中に入って来てどうする？！

音漏れしないのは嬉しい配慮かも知れないけど！

日本のトイレにも是非付けて欲しい機能だけど！

「あの、ここってどこですか？化粧室でもないですよね？」

「……………ミサキ様。離席の理由はお手洗いでは無いのでしょうか？」

ひいひい、バレバレですか。

確かにそうですー。あの場所にあのままいたらヤバイ事になっていたよ…て、あなたが一緒に来ている事がすでにヤバいんですが！

「…ッ。何の事でしょう」

シラを切れーっ、私。

「我慢、なさらないで下さい。ここには私しかおりませんよ…」

え？我慢しなくてOK？

ホントに？

怒らない？怒られない？

しばらく私の葛藤は続いた。

じっと観察されているなんて知らないで。

はち。未知との遭遇？

「ふうっ、ク…っ」

ダメだダメだーっ！いくら何でも失礼すぎるだろう。

と、私を諫める私と

良いって言ってるし、思い切りやっちゃいなよ？無理に引っ込めても後つらいよー。

と、GO出す私があります。

どちらかと言えば、GO！しちゃいたい。だって我慢してきたし。いや、やっぱりマズすぎる。ここはひとつ、結界はそのままに部屋から出て行ってもらって…

「ミサキ様？」

内心の大葛藤で挙動不審になる私を訝しむカナギさんの声、が、近い近い近いーっ？！

めっちゃ顔近！

髪も肌も白い人の、真っ赤な目だけが視界に入ってきて来るくらい近い。近すぎて焦点が合わなくなりそうなくらいだ。

「どこか、具合でも…？？」

と、要らない心配かけてくれましたかカナギさん。  
具合も機嫌も悪くなってなんかいませんよ。

スツと大きな白い手が目の前…正確にはおでこに添えられた。

「…っ！」

上げられた腕の分、ロープの袖が少しズレて、大きな石の埋まった  
木製のバンゲルが見える。この石もまた、目と同じで赤かった。

そう

彼は、ロープを着ていた。

「ふぐっ…ふっっ」

「ミサキ様？顔が赤いですよ？」

ダメだっ！



私よりもいくぶん高い所に顔があるので、見上げる形になるわけだ  
けど、無表情のそれと目が合った。

真っ赤だったはずの目が、金色になっていた。

「く~~~~~く~~~~~っ!」

いや、怒っている事は理解しております。誰だって、自分を見て爆  
笑なんかされて、愉快的感情は湧かないでしょう。湧くはずがない。

けども、

魔術師で

中性的容姿で

銀髪赤目で

ローブ着ていて

おまけに怒ると目が金色

…笑わずには、いられなかつたんです。はい。  
反省しています。だから

自家製冷房、そろそろ止めていただけませんか？

いくら師走の厳しい寒さ対策のインナー装備中だからといって、ジヤージはそれほど防寒に向いてないんです。  
まー、こんな所もコテコテなお人だねー。なんて、流石に冷えすぎた室温に笑いがようやつと引つ込んだ。

吐く息が白い。ほっぺたと指先がびりびりする。

そろそろ止めてー！休みに入って治りかけたシモヤケが振り返す！あれって治りかけ、すんごい痒くて嫌なんだよね。

ブカブカのシューズに包まれた足先の感覚が無くなっていてすでにヤバい気がしまーす。

この国に、シモヤケに塗る薬ってあるんだろうか？

なかつたら治療魔法かけてもらう？シモヤケに？

だんだん無くなっていく感覚に、室温の急過ぎる変化を体感する。

ヤバくない？この状態。

冷気の元になっていると思われるその人は、相変わらずのお目々が金色ピツカピカ。

「じゅめんらさいっ！」

うおっ！寒さにかじかんで口がうまく回らなかつたや。

謝罪と共に勢いよく頭を下げてみたものの、どうにも締まらない結果となったようだ。カッコワルウ。

えーと、何か反応してください。

「…それで」

マグロも凍る冷凍庫を彷彿させる（入った事は無いからマイナスいくらかあるか分からないけど）冷気が止まって、その元となった魔術師さんが口をひらいた。さっき心配してくれた口調とはほど遠い、これまた冷え冷えのお言葉。

「出会ってすぐの私を、ここまで笑い者にする理由。勿論、話して下さいますよね?」

はい。納得してはいただけませんが、言い訳頑張ります。

「なるほど…で、済ませてしまいがたいのですが」

消音結界は、音洩れは防いでも魔力の変動は丸分かりだったようで、言い訳しようとした瞬間にガライア王子を頭に先程のメンバーが集まった。

大いに笑い転げたという醜態は一人の目撃者に収まったものの、爆笑した事はバレて皆の前で言い訳をする事に。

「いや、本当によくあるですよ銀髪赤目。物語の中だけど。おまけに魔法なんて無い世界にいたくせに、実際に使う人会ってみたらまた物語の中そのまんまだ！  
て、思ったらフツフツと笑いが込み上げて来ましてね？」

ツボにハマっちゃって止まらなかったんですよ。

と、すっかり振り返したシモヤケを擦りつつ訳を話してみた。  
理解は得られないようで依然ピンチである。が、今度は止めてくれる人がいるのでちょこつと安心。

「よくいるんですか」

「本当に、よくいるんですよ」

少なくとも、私が借りた本には高確率でありました。  
読書偏りすぎ？偶然です。

実は、カナギさんの容姿。

カラフルな色彩の人種ひしめくこの国どころか、世界的にみても特殊なものだった。

また、その色合いから『魔王の生まれ変わりではないのか』と、魔力が強い事を含めて散々言われていたらしい。

……私が、渾身の土下座をかましたのは、しばらく後の事となる。  
本当に、すみませんでした。  
もういいんですよ。と、笑って許してくれたけど。

「ミサキ。手をどうした？」

こする両手が気になるのか、ガライア王子が声をかけてきた。  
ちなみに爆笑理由に理解があるようには見えませんでした。  
そりゃ、ここが面白いんだよーって説明されたところで、同じように笑う事なんて出来ないよね。

「凍傷か？」

キツとカナギさんを睨む王子様。

「いやいやいや、そこまで酷く無いよ。シモヤケだって」

軟弱者ですいません。寒さ厳しい地域の人から笑われそうなほど、

あっという間にシモヤケの完成です。

「塗り薬か何か貰えます？あつ、温泉に浸けたい！足湯とかありま  
すか？」

結局、ガライア王子のご好意の治癒魔法をかけてもらうことにした。

温泉もいいけど、初魔法だ、初魔法！

でも、初めてかかる魔法がシモヤケの治療で。

ま、大怪我でかけてもらうとかじゃないからいつか。

「かけるぞ」

一声かけてから、包み込まれた両手に白い光が燈る。

ほんわり暖かい、優しい温もり。治ってるのかな？治りかけの痒さ  
なんかまるでない。

いいなーこれ。家でも使えないかな？

覚えたら是非とも覚えて帰ろう。

「…これでどうだ？」

光が消えて、手が解放される。赤くなって可哀相な小指から人差し  
指は、全部きれいに治っていた。

「すごいすごいっ！ありがとう！」

感動〜っ！冬のかさかさな指先まで治ってるや。ハンドクリーム要らずだね。

「て、事は、リップクリームも要らない？」

夏はともかく、冬は必需品のリップクリーム。

化粧品の類は持っていない私も、手と唇の荒れには面倒と言えなく使用している。

化粧水くらい使え！と、友達に言われて、一番安いやつを使いはじめたのも最近の話。

化粧水はともかく、ハンドクリームとリップクリームは要るんですよ。制服なら一本入れてあったけど、今日はジャージでポケットは空っぽだ。

ティナリア姫に言えば用意してくれるかな。質が合えばいいんだけど。

合わないと、全然効かなくて塗る意味無いんだよね。

酷くなってピキッと割れると、見た目も痛いし。

「ん？ああ、この程度ならば…」

「……………」

再び手が輝いて、今度は私の唇を治療してくれるガライア王子。

指先がそつと唇に置かれています。さつきみたいに、あったか〜い。なんて思う余裕がアリマセンよ!？

多分五秒もしないくらいだったろうけど、動揺しまくった私には、えっらく長く感じられたよ。

息すらできなかつた。頭の中は『ひよえええええっ』としか言えない。なななな何ちゆう事をサラっとしてかしてくれるかな?!  
このオージサマはっ。

ちなみに、動揺が収まってから確認すると、勿論かさつきが収まっていて何も塗っていないのにぶるんぶるんな唇になっていた。

うわーい。便利すぎるぞ治癒魔法。

きゅ。未知との遭遇??

王国ターシエルク。

かつて魔王が治めていた土地は、その地に宿る神の力により豊かなる実りをもたらす国となった。

国のほぼ中央に首都デリセアセスがあり、四つに分かれた地方には他に類を見ないターシエルク固有の特産物を生み出す。

実際に神様が存在し見守っているなんていうのは、特殊な国として世界でも有名な話だそう。

その恩恵とも言える産物は様々で、農業、酪農、漁業、鉱業、どれもこれもが充実し安定した実りをもたらしてくれているという。

そして、それから加工する技術力も。

生産、加工を一カ所でやっていたらきつと儲かるんだろうなあ。

と、通販の『お安く提供出来る理由』をボンヤリ思い出した。

国の成り立ちも、王と王妃、それから二人と共に戦った騎士と魔術師だけから始まり、そこから様々な人が集まっていて、今では世界で一番の多民族な国ではないかと言われている。

そんな民族の一つの人と、私、根津 美咲は向き合っていた。

「はじめましてえっ！アナタがガライア王子のシェリクねえ？アタシはティナリア姫の近衛騎士のファーリーブっていいいます。どうぞよろしくね！」

…この困惑を、どう表現すればわかって貰えるんだろう？

やけに友好的な、かつ勤務中にそんな言葉遣いでどうよ？な自己紹介をしてくれた、ファーリーブさん。ニコニコ顔のティナリア姫の後から現れたその人は、私が見上げるほどの高身長。そして、しなやかな身のこなし。

服装は、エンジュさんとほぼ変わらなくて同じく剣がお腰に装備中。

うん。騎士だしね。

んで、えらく高いテンションと友好的な台詞のわりに、ファーリーブさんの表情はピクリとも動かない。

まるで仮面を付けたかのように。

歓迎されてるの、されてないの、どっち?!

てか、本当に仮面なんじゃないのその顔？

「ミサキ様のお部屋が整いましたの。早速案内したいのですけれど、よろしくて？お兄様」

キラキラとした目が眩しいティナリア姫。

やり遂げた感が、充実した表情が、より可愛さを引き立てています

よ。お仕事早いですね。

てか、ティナリア姫が揃えた部屋かあ……乙女心満載な、きゅーてい家具がでんと待ち構えていたらどうしよう。

唇の荒れを治療してもらい（こんな行為に免疫なんて無いよ！？こ、これは医療行為。医療行為：と、毎秒五回ほど脳内で唱えること一分弱）ふと我にかえると部屋にいた全員が、回れ右をしていて下さっていた。

ぐはあ。

いたたまれなさが、半端ない。穴があったら入りたいという心理がよく理解できました。

もう狭い所に隠れるんだつたら何処だつて何だつていいです。

てか、オクナナさん。耳でわざとらしく目隠ししないで。何かムカつく。

いや、別にいかかわしい事をしたんじゃ無いんだよ。単に治癒魔法かけて貰っただけで。

だからといって、人がいる中はいどうぞなんて言えないし！そもそも、唇まで治してもらうつもりもなかったし！

…あ、そっか。医者にかかったと思えばいいのか。

ただの問診でも人目のある所ではないもの。だから背を向けてくれた事は感謝しないとだね。

ウンウンと一人悩んでその間、目の前の人に百面相をさらし、最後にパアツと納得顔でミサキが表情筋シヨを終えた瞬間

バーン！と、扉が開いてターシエルク唯一の王女が現れた。

このお姫様、扉は勢いよく開けるものらしい。きつと、蝶番は丈夫に出来てるんだらうなあ、このお城（？）の扉。何はともあれ、治療行為を姫に見られなくてよかった。本当によかった。

きつとキラキラ増幅するに違いないよ。それに比例して、気まずさも増えたんだらうなあ。

友好的でいてくれるのはとても有り難いけど、正直そのお目々キラキラが耐えられない。

何を私に期待してるのかお姫様。

…いや、やっぱり言わなくていいや。聞けば墓穴しか掘らなさそう。

でもタダでお世話になる立場なんだし、部屋に強く文句は言えまい。弱くなら言っけど。

心構えをしておこう。

「ミサキ様のご趣味が分からなかったの、本当に基本な物しか置けませんでしたの。実際に見ていただいてから調整いたしますわ」

……………ほっ。

「ありがとうございます」

意見が通るんだ！うわぁ安心した。

乙女心満載にされた所で、似合わないしキャラじゃないもの。  
助かる〜っ！精神的に。

「私とフェアリープとメギイ達で候補はある程度揃えましたのよ？」  
ねーっ！と、フェアリープさんに体を傾けて問い掛ける。可愛い女  
の子の仕草が似合う似合う。

「実際に会って思ったんだけど、絶対似合うと思うのお。楽しみね  
え」

相変わらず、表情が動きませんよフェアリープさん。  
何ですか、このギャップ。

あ、これが俗に言う、ギャップ萌えてやつ？  
いやいや、これは萌えられないですよ。お姉キャラって割には、動  
きは女性らしくない。  
何より、表情が動かない。口元ですらピクリともしないのに、感情  
豊かなお姉言葉。

どやって発音してるのか。  
腹話術？何のため？

ああ、そうそう。  
色黒ランキングがあっさり更新されました。断トツ一位でフェアリー  
プさんですおめでとう。ぱちぱち。

「あの…」

盛り上がりを見せる（？）二人に、聞かなければ一生の恥と覚悟を決めて問い掛ける。

「フアーリープさん、女性です、よね？」

こんな事を聞くのはものつすごい失礼だろう。わかってる。

さつきから、連続失態のコンボ数を順調に重ねている気がする。人を外見で判断しちゃあいけないのもわかって…て、爆笑した私が言うのも何ですが。

中性的な容姿のカナギさんとはいえ、喋れば男の人って分かる。体つきも細いけど男の人だ。

けれど、フアーリープさんの場合、声も体つきもあてにはならない。

（脳内の（ギャラリーの皆さん。

服を着た、黒ヒョウの性別って何処を見れば判別出来ますか？

フリープさんの頭部は、まさに黒ヒョウそのもので。

体は人と一緒みたい。…肉球お手々じゃないのか。  
チツ。

ヒョウの手じゃあ剣装備出来ないか。あ、手袋かと思ったら指先まで黒い毛皮でした。

声は男の人みたいに低い。けど、黒ヒョウが人の声で喋るとどうなるかなんて知らない。

女の人で低い人もいるし、言葉遣いはお姉さんだし。仕草は女っぽくは無いけどスマート。

何よりティナリア姫の護衛だから、女の人の可能性が高い。

そう思つての問い合わせだ。呆れた顔はしないで下さい周囲の人達。後で気まずい思いはしたくないんですよっ。

「えー。見たら分かると思うんだけどお」

困惑声でも、無表情。

ヒョウって表情かわらないのかなあ。

見ても分からないから聞いたのにつ！

「私、男よお」

……………性別がどっちでも、もう驚きはしないけどね。

ターシエルクの国の神様は、色々な恩恵を与えてくれる。それは、目に見えるものとは限らない。

基本獣人は、人の言葉を話すのに向いた体の造りをしていない。

似たような声なら一部真似る事も出来なくはない。が、ワンコやニャンコが『ゴハーン』と鳴くのと同じ位のレベル。意思の疎通は筆談か、ジェスチャーになるらしい。

余所の国では。

この国独自の魔法があつて、伝えたい事を相手に伝わるように音に出す。

なんて便利な魔法があるらしい。

フアーリーブさん始め、人の言葉を話せない種族の必需品のような魔法。

ターシエルク国内でしか威力がないので、種族の出身地以外はターシエルクで見かけない。なんて種族も多いらしい。

「ちなみに、ミサキちゃんもかかっているよ」

と、オクナナさん。

「何だか余計にかかりすぎてるみたいで、心の中で思っただけの事も漏れているようだけど」

へ?!

「いや、全部じゃないと思うぞ?ただ、口が動いていないのに声はしていたことが多々あつたな」

え、心をよまれていた訳じゃなく?

会話がスムーズに進むと思つたら!!駄々漏らしてたんですかいつ。なんてこつた。

「でもフアーリーブさん、伝えたい言葉と伝わった言葉がずいぶん違うみたいけど」

ずっと沈黙していたネズ君が指摘し…伝えたい方の言葉がどうして

分かるの？

「そおなの！アタシ別にこんな言葉遣いじゃないのよあ。人でわかってくれたのは初めてっ！ビックリだわあ」

ちよつと目をひらいたファーリープさん。

やっぱり仮面でも被り物でもないらしい。

「…ちなみに今の『そうなんだ！俺は別にこんな言葉遣いしていない。人でわかってくれたのは初めてだな。驚いた』って、言ったよね？」

がしいっ！と、ネズ君の手をとりブブブンと激しく握手のファーリープさん。

「そうっ！その通りよあっ！うれしいわあ、わかって貰えて。それにしても、私の言葉が分かるって凄いわね。そんな人、初めて見たかも」

今までの苦勞が僥ばれる叫びが聞こえた気がした。

そして、やっぱりこう言っでは何だけど

性別、聞いておいてよかった……。女性扱いするところだったよ。

じゅ。未知との遭遇？？

フアーリーブさんの性別がわかってスッキリし、自分にも翻訳魔法とやらかがかかっていて、なおかつかかりすぎていて思考が所々漏れていた事に頭を抱え、先程の治療風景まで思い起こしてしまい床に横ローリングしたくなった頃。

「さあ、急がないと時間がありませんわ！部屋に案内しますっ」

と、強引にターシエルク王家の末っ子に導かれて廊下を突き進む。急ぐ理由は何じゃるな？

あ、お祭りの準備があったりするのかな。

地下からようやく階段を上がって一階と思われる所に出てきましたよ。

明るい日差しは、確かにまだ朝っぽい感じ。きれいな日本晴れ…じゃない。ターシエルク晴れ。うーん、お祭り日和だ。

窓から見える景色は、とりあえずの感想はデカイ屋敷としか言いようが無い。

多分、王族が住んでるならお城なんだろうけれど。日本のお城とは全然違うなあってのは当たり前か。

他所の国のお城だって、テーマパークのしか知らないから比べられない。さすがに本物はあんな中身では無いのだろうし。

珍しくて視線をあちこちにやりつつ、後続く私。

常にそんな長さなのか、長いドレスのスカート丈をものもしないで、大人とほぼ同じ速度で進んで行くティナリア姫。

私があそこまで長さのあるスカートはいて、同じ速度で歩いたら突

っ掛ける。絶対。さすがお姫様。

おお。第一メイドさんと思われるおねーさん発見ですよ。しかも複数。

と、ここでテイナリア姫、歩調を一切落とさずスルーです！

壁に控えて、顔が見れない位の深さでピシッとお辞儀したままの姿勢を保った彼女達を、置き去りにどんどん進む。

もうちよつと見たかった！

だって、本物だよ？見たことが無いもの。

一度だけ、ガソリンスタンドでメイドっぽい格好をした人達を見た気がするけれど、友達に言ったら見間違えじゃないの？と言われて悔しい思い出がメイドさんにはあるんだ。

確かめようにも、遠足の帰りで私以外が全員寝ていて証人もとれず携帯も持って無いから画像もとれず、結局何だったのかは謎のまま。さすがに全クラスは聞いて無いけど、他に目撃情報は現れず。まあ、見間違えでは無かったとしても『ガソリンスタンドメイド？』か、『趣味でメイド服着たまま給油に来た人達』のどちらかなんだろうな。それはともかく、本職、本業のメイドさんですよ。何やら意味も無くワクワクしますねー。

…それにしても、彼女達とすれ違った時微か……いや、しっかりと香ったバニラの甘いニオイ。ガライア王子の気をひく為に、本当につけてるんだーと感心致しました。

王子効果か、恐るべし。

んでも、全然効果がないどころか嫌がっているようだから王子情報

を更新した方がいいと思います。

てか、効果が無さそうって見て分からないもののかなあ。

それだけ必死なのか、対象が見えていないのか。見えてなさすぎると思いますよ。盲目ってコワイな。

あ、お約束で、私の部屋付きのメイドがこの後紹介されたりして？  
凄い美少女で、多方面でめったやたらに有能な感じの。

多少ドジでもいい。

……… バニラの香を振り撒くメイドさんじゃありませんように。

畏まって並んだメイドさんたちを通り越し、どんどん進む。

内装も変わってきて、

豪華になってきたっばい。

うーん。どこまで行くんだろう。けっこうな距離を歩いてるよ。毎日これじゃあいい運動になるね。

学校までの距離が自転車通学の許可が下りるギリギリで外だったからと、短い自転車通学な毎日プラス体育の授業位しかない運動よりも、遥かに今の方が体を動かしてると思う。あの、そろそろこのペースで息が上がってきてしまっんですが。年下二人より、体力無い事を情けないけど認めます。  
休憩プリーズ。

「ガライア王子様」

……… そんな時に声をかけてきた人達に、タイミング的には感謝します。

タイミング、には。

メイドさんの一団（あれからいくつかの集団を横切り、そのどれからも）から香ったバニラの香水…？が、あるかどうか分からないけれど、とにかく彼女達のは香ったと言えよう。

この人達は『さっきまでプリン作ってました』？…うーん違うな。『出掛けの間際にバニラエッセンスをかぶって来ました』位のバニラくさい。鼻からプリン食べてる気分になります。

おまけに化粧独特の匂いまで振り撒いてるよ。混ぜるな危険んんん！

そんな鼻へのダイレクトな刺激よりも、私は視覚からの刺激に釘付けだった。

現れたのは三人のお嬢さま。服装からして貴族なんだろうなあ。ガラリア王子に声をかけてきた事もあるし、多分。

「守り神様、召喚の儀の成功。心より御祝い申し上げますわ、ガラリア様」

真ん中の、ターシエルク三兄弟よりもやや色味の薄い金髪の女性が話し出した。

私はその口元をガン見ですよ。

日本だって、時代によって流行る服や化粧が違ふ事はわかっている。「懐かしの」な歌番組が当時の映像をながすと、画面の人物は時代の先端の格好で現れる。

ああ、お母さんの娘時代はこんな格好が流行っていて、真似る若者が大勢いたんだね。と、今のギャップを感じるのだ。

ふんわりカールさせた先端を、遊ばす事無くビシッと揃えた髪型とか、眉毛が太かったり、極限まで細かったり、肌を焼いてみたり、美白になって…なつたままかな？今は。

服も様々。さすがに歌番組で着るようなのを普段着にする人はあまりいないだろうけれど、時代はよく出ると思う。特に女性の流行つてものは。

で、だ。

恐らくはこの人達の格好は、今のターシエルクの流行の先端と見ていいのかな？

彼女達の化粧、とても私には不思議なものに見えたのは、見馴れないから仕方がないとした、言いようが無かった。

彼女達のメインカラー。

ひたすら緑。

ティナリア姫が足首までのドレスに対して、靴の先しか見せないほどの長さのドレス（よく突っ掛かけないなあ）も、髪を飾る色々な物も、あまつさえ、顔を彩るお化粧も。

口紅と呼んでいいのだろうか。緑色なのに。

まあ、それはともかく。

緑色の唇には違和感しか感じない。

目元全体に、緑のアイシャドウで凄まじくパンダ目に。寝不足の人

を演出しているのか、な？

ほおべに…チーク？も緑で、顔色が悪そうに見える。

ガライア王子をうつとりと見つめる姿はスッピンにでもなれば頬染めているんだろうけど、今はとてもそうとは見えない。

乙女の表情が台なしだ。

長い丈のドレスのデザインは、まだまともに見えるのに。

色は濃淡の違いはあるけれど、これまた全身緑色。

首も袖も裾も、顔以外どこの肌の露出もない。

指先まで緑の手袋装備で、バッチリUV避けしている人みたい。あとは帽子と日傘があれば外だって完璧。

胸元や袖口を飾るレースも緑。徹底しています。

生地をたっぷりと使ったヒラヒラドレスは、ある意味女の子の憧れかも知れないけど。

何だろうね。この心底沸き上がる違和感は。

視線を上に向けると、全員全身緑で固めた三人の頭には、葉っぱつき  
の枝がいくつも刺さってワサワサしていた。

百歩譲って簪のもりか。

携帯森林浴セットですか。

やぶの中からはい出て来た人に見えるよ？

えー……これがお貴族サマの最新流行ファッションなんでしょうか。  
流行りの色を纏うにも限度があると思うんですが。

もっと言うと、香水つけるのもマナーがあったはずだよ。

それくらいは化粧素人の私だって知ってるさ。

メイドさんたちが、仄かに程度に付けていたんだもの。これは明らかに付けすぎってもんでしょ。

全く、どこまでお約束なんだこの人達は。

あ、身分が高いと比例してたくさん付けるルールがあるんだっただら知らないけれど。

あつたら嫌な決まりだな。偉くなると鼻が馬鹿になりそうだな。

それにしてもこの格好で、一晩待っていたとか？うへえ。ガライア王子の気をひく為にしたんだよね？

何かのギャグですか？と思いたい所だけれど、本人達は至って真剣なご様子。

この格好でオトせると判断されているガライア王子って……。まさかこれらが萌えのツボなのかと思っただら違うみたいだ。顔が引き攣ってるや。何だか一安心ですよ。

うん。さっきお約束な人達だと思ったけど、本来出て来るなら

『私なんか太刀打ち出来ないくらい、容姿も家柄もお似合いのお姫様』のはずだ。間違っても私に『うわあ、ガライア王子大変だ』と思わせる人達じゃなく。

うーん。

メイクさーん、衣装さーん、やり直してくださいさーいつ。

「はじめまして。……わたくしはアグネイシラと申します。あなた様のお名前を、聞かせていただいても宜しいでしょうか？」

淑女の礼でもってうやうやしく下げられた、葉っぱまみれの頭に我に返る。

どうやら私に聞かれたようだ。

いやー、今回はぜんっぜん会話の内容聞いてませんでしたよ。右から左に行く前に、耳に入ってきてやしない。

「あ、ミサキです」

根津。省かせていただきます。ネズくと被るし、ややこしい。

「ミサキ、様……………」うん？何だ何だ。そのウツトリ表情は。全く意味不明だ。

ちなみに聞いて来たのは、さつきから一人しゃべりっぱなしの、淡い金髪の人。

ウルつや効果が無駄に効いてる紫がかった緑の唇がはっきり言ってます。キモいです。

「ガライア王子、わたくしが『シェリク』という事が証明されましたわ！」

うえっ？何で何で？

なぜか勝ち誇ってアグネ…？なんちゃらさん。ゴメン。その唇が印象的すぎて全然他が覚えられない。

理解不能な化粧もきつと一役買ってると思うんだ。

素顔が想像もつきません。

「……………ミサキ、様？」

「ミサキさま…」アグネさんの右と左の方々も、ぽつりと私の名前をつぶやくと、興奮した様子のアグネさんの動きがピタリと止まった。

ちなみに右の人がオレンジ色の髪の毛で、キラキラな濃茶な緑の唇。左の人は水色髪で、つやぶるんなメロンの黄緑の唇。

うん。食べ物に例えたら何とかマシに見えるぞ文章ならば。

アグネさんの色は私の手に負えないけれど。口紅のバリエーションは豊富らしいね。髪の毛まで緑にはしないんだあ。染める技術は無いのかな？

「なっ、どっという事でしよう。」

「アグネイシラ様、私達は急いでおりますの。詳しい情報は後ほど皆に発表がありますわ。それでは失礼」

ちよ。よくわからないけどティナリア姫、詳しく今の出来事説明してもらえません？？

緑色三人姫を置いて、再び元のペースで移動を開始した私たち。気分的には置いてきぼり。

休憩にはあんまりならなかったなあ……。

じゅいち。納得？

たどり着いたのは、うれしいお約束、ゴウジャスな部屋だった。

いや、ね。でもただの高校生には分不相応ですよ。

この広つい空間！絶対持て余すよ。何置？って私の物差しじゃあ計れません。えーうー…音楽室よかうんとこさ広いよね。ここ。

私なんか、あの窓辺の隅っこにカーペットしいてコタツいっこ置いておけば何の問題も無く過ごせます。すでに床はフカフカ絨毯だけです。大人しくゴロゴロしてます。

あ、みかんは置いといて下さい。かごに盛って。

あああ、そんな立派な鏡台とか持て余します。鏡なんて洗面所に一枚あれば十分じゃあないですか。

クローゼットの中身は緑一色じゃない事を期待していいんでしょうか、ティナリア姫？え、衣装部屋？……………部屋？

寝具もシングル布団でけっこうでございます。

天蓋付きのどデカイベッドとか、要らないですよ。噂は聞いていたけど初めて見たなあ、こんなもの。

しっかしコレの意味って何なんだろう……………蚊帳とか？

家に帰って、覚えていたら検索しよう。

家具の素材はツヤツヤなミルクチョコレート色の木材で、壁紙が蔦の地模様が入った薄いクリーム色とパステルピンクの薄い縞模様と、ここまですら落ち着いた温かみのある部屋なんだけど……………。

かわいいピンク色がたっぷり配色してあって、チョコレート&ストロベリー&クリームな、乙女心満載ならぶりー部屋になっていたよ

〇  
おおう。これ私に似合っーなんて自称するのもおこがましいのですが？

せめてもの救いは、チョコレートブラウンの落ち着きか。

「あら、気に入りませんか？では色を少し変えますね」

と、またもや漏れたつぶやきに、ぽんっぽんっとなんて姫が手を叩いた。あちゃー。揃えてくれた人に失礼な事が伝わっちゃった。ごめんなさい。

でも、やっぱり似合わんと思うとです。素敵に乙女すぎる。

てつきり、人がわらわら出て来て家具を入れ替えるかと思ったら

「んっ？」

目の前でおこった事が信じられなくて、ぱちぱちと瞬いた後、目をこするなんてベタな事をしでかした。

だって、家具がコロツと色変わりしたんだもの。主にピンク色に。チョコレート色の所が、莓シロップ色となりました。ほとんどピンク&白になって乙女度数アアアアップ！

いや、かわいいよ？うん。可愛くなったけど……色が変わるんならブラウン増やして欲しいな。私に合わせるならさ。

それにしても、模様替えがちょう楽デスネ。これも魔法っすか。便利過ぎる。

「こつこつという感じも良いと思うのよ」

と、ファーリーブさんが大きな手をサツと振ると、今度はオレンジ&紅茶色がメインな部屋になった。かわいいのは相変わらずだけどピンクより落ち着く。

「が、装飾がわさつと増えたような……。カーテンやクッションがフリルだらけでとっても乙女に！  
も、もうちょっとシンプルがいいなあ。「では、こつこつたものはどうでしょう」

誰かが合図するたびに、家具の色が変わるのは便利過ぎるよ。位置とか、置いてあるものは変わらないみたい。

「ちょっと待って。何か急いでいた訳じゃ無いの？」

ブルーの部屋、白黒な部屋、赤&金色の部屋、紫な部屋、ダークブラウンの部屋、パステルカラーな部屋、白&金色の部屋……。

模様替え魔法を使う人はすでにターシエルク人全員になっていて、みんな面白がってない？！ってくらいよく見る時間も無く変わってゆく。

そんな短時間でどう分かれと言うんだ。

結局一周？したのかストップをかけたら最初の部屋になった所だった。  
どうせ決めれるんなら、じっくり見たいじゃないですか。てか、見せて下さい。

でも、急かされた理由も知りたいし。さらに、その前に……

「あの、質問そのいち。さっきの緑のお姫様？達に遭遇した時って、声漏れしてました？」

していたら、絶対変な顔されるような事を思っていました！

自分が絶対の自信があると思っっている格好を、全部否定していたものね。

ごめんなさい、いた場所と装飾文化が違うんですって謝らないといけないかな。

……出来れば、香水だけはもうちょっと控え目になってほしいな。今でもブクブクとうがいをしたい気分なもの。何となく。

うへーん。口の中に食べてもいないプリン味がする気がするよ。

「いや、大丈夫だ。名前を言うまで、ミサキは黙ったままだった。

…一つ言っておくが、あれらの格好は一般的なものでは無いぞ」

よっしゃああ。初対面でこちらの不適切な態度はかろうじてしなかつたって事だね！

話かけられる前の内容は全部上の空で覚えちゃいないけど、それはギリセーフと信じたい。

「じゃあ、あれは貴族的な格好と？」

舞踏会とか緑の海になりそう。あ、男性陣はそうでも無いのか。でも男の人の礼服用てだいたい黒っぽいよねえ。

黒&緑……………海苔？

想像した舞踏会が、あんまりきらびやかにならず少しがっかりする。例えにいいのが思い付かなかったけれど、別に舞踏会参加などしたくは無い。

いや、海苔は美味しいけど。こご、色とりどりの華やかなイメージってあるじゃない？

そうです、こごであって欲しいただのイメージの押し付けですよ。あくまで私の世界での舞踏会想像図ですが。

ティナリア姫の今のドレスは淡いピンク。って事は大人になると緑限定になるんだろうか。

「いや、色の指定は大まかには無い。王族以外は禁止されているものもあるにはあるがな」

慌ててガライア王子が貴族は大人になったら緑一色説を否定してくれた。

よかった。緑は目に優しいと聞くけれど、見つめる対象が心に優しく無いよ。

「彼女達は、私の好みの服装はこごだと、独自に調べた調査結果の格好をしているのだそうだ。今では他の姫達にも多少影響しているようだが」

もちろん、事実無根だそうぞ。

「…それ調査した人、どこの誰よ？」

こうだと決め付けるにも、ほどがあると思うのですが。誰ですかへツポコ調査員は。責任者は速やかに出て来て説明してもらいましょう。

でも、そっかあ。彼女達がファッションリーダーになっているのかよくついて行くなあ、ターシエルク一部女子。

ん？て事はガライア王子って緑一色のあの奇抜なレディがお好みと思われているんだ……………。

どんな範囲までその誤情報が浸透してるんだろ。

さっきのメイドさん達は黒ワンピースに白いエプロンみたいだったけど、あれは制服なんだろうし。お城のメイドさんはきっと身分の高い貴族のお姫様とかお嬢様とかだから、彼女達のオフは緑色に変身するんだろうか？

ほんでもって、一般の娘さんも緑を着るのかな。んー。だんだんと街の光景とか想像が難しくなってきたよ？

「彼等にも原因が少しはあるのかも知れませんが。…ミサキ様、部屋付きの世話人を紹介いたします」

チリリン、と、これまたお約束な呼び鈴を鳴らすティナリア姫。どうでもいいけど、その鈴すんごいイイ音がしますね。用も無いのにやたらと鳴らしたくなりそうなんです。

思わぬ誘惑が発生し、鈴に気を取られているうちに現れた人達に目をやると、先程の彼女達の格好が、少しだけ理解できた。ような気がする。

現れた人数は三人。

第一印象は

緑のアフロでした。

世界中でターシエルクの中でしかほとんど見ることが出来ないような、レアな種族。  
ファアリープさんは獣人だけど、世界中にいるメジャーな種族なんだそう。

人間はほぼ何処にでもいるのだと。その種族以外は立入禁止の国くららしい。

人間が居ない区域は。

んで、現れた緑のアフロな人達。

百人も居ない人種で、皆、ターシエルク王家に仕えているらしい。彼等は樹人。

頭がワサワサテンコ盛りに丸いのは、全部葉っぱで彼等から生えているもの。観葉植物のベンジャミンな感じ。何と肌も緑色。ヒラヒラした、濃い緑色の服。メイドさん達とはデザインが違うようだ。んで、白いシンプルエプロン。

すいません。正直、区別が全っ然つきません。三つ子かって思う位にソックリさんです。

右端から、ビンサ、テハース、ミオニ。

例によって、人の言葉は喋れないらしくて魔法での会話となりました。

獣人と違って、表情筋の存在すら無いらしく、ファーリープさん以上の無表情で自己紹介されました。

メギイと呼ばれる彼女達は、王族専用の樹人メイドという呼び名らしい。

小さな頃は人の侍女を付けていた王族も、一定の年齢からメギイに切り替える事が多いのだと。ガライア王子も、ガーナム王子も。テナリア姫はまだ数人。で、そばに置く彼女達が全身緑だからそれを真似ている。と。

「…真似るにしたって、もう少し見れるように出来ると思う…あれじゃビンサさん達に失礼だよ……」

気が付けば呆然とつぶやいていた。

いや、あのお化粧がターシエルク最新のものになっちゃうかもただね。あの緑な姫達のカリスマが上がると。

ああ、流行りって怖。

「それを言っと『あなたの為のお洒落なのに！』って、望んでない事勝手にやっておいて王子責めるんだぜ？あれは笑うわー」

エンジユさん、笑っていないで止めてあげようよ。

国中の女の子が緑のパンダ目になってもいいの？

私がここに呼ばれた理由。

緑化の流行を防ぐ事だったりして。

残念ながら、服や化粧に対して詳しい知識やこだわりなんてありませんか？

じゅに。腹ごなし？

手の中に納めた、真っ赤でツルツルした果物をしげしげと眺める。大きさはグレープフルーツ位か。りんごのようにてっぺんに枝が付いている。

中心に種が一つ。そして、皮ごと食べられるらしい。

そうと分かれば丸かじりだ。いただきます。

水洗いしてもらったそれを、大きな口をあけてかぶりつく。

かぶり。

ツルツルの皮が歯に当たって裂け、じゅわりと果汁がたつぷりの甘酸っぱい果肉が口に飛び込む。

よく熟れた桃みたいなおいさ。でも、これは桃じゃない。

「ミサキ。美味いか？そのさくらんぼ」

屋台のドリンクカップを片手に、変装したガライア王子が声をかけてきた。

もちろんこれは、ガライア王子のおごりである。ありがとう、ありがとう。

元々ここは果物屋さんで、お祭りの時に生ジュース屋台に変身するという店らしい。背後の店には色々な果物が並んでいてもカラフルだ。

りんご、オレンジ、イチゴ、桃：季節感無いな。

もちろん異世界。全然見たことが無い果物もあって大変楽しい。てか、知ってる果物があった事にビックリだよ何であるんだろ。まあ、バナナっぽいのはあるから色々被ってるのかもしれない。

見たことの無い果物を次々と指差して、名前とどんな味かと教えて貰っている的真つ赤な果物を指した時、王子様は「これはさくらんぼと言って…」と、馴染みのある名前を口にした。

さくらんぼ。もちろん知ってる。時期になると食べなくなる果物の一つ。

生の物と、缶詰にされたものの扱いの落差がえらく激しい果物。でも、こんなデカくは無いよ。いくら高級贈答品だって、こんなにはデカくはない。

という事で、検証、実食となりました。むむむ、間違いなく、さくらんぼ。

久しぶりだなあ。見た目通り、アメリカンじゃあなくて日本の赤いさくらんぼの味がする。

すんごく甘いのは異世界補正か。いい仕事だ！

さくらんぼをそのままデカくした、みたいな事にはなっていないくて、食べ進めたら控え目な大きさの、つまり私が普段目にするサイズの種が現れた。

この果肉に対してこの種の大きさにだと、間違えて飲み込んでしまいきそう。ちょっと危ない。お子様は注意が必要かも？

それにしても、わーい、食べられる所が、いっぱい  
お腹もいっぱい

さくらんぼ一つ食べて満腹って、どんなぶってんのとどつかれそうだけど。

仕方がないサイズって事で納得していただきたい。

一粒、なんてかわいい単位じゃあ無いものコレ。

うう、浮かれてペース配分を間違えたわ。

ここに来る途中で見た、気になる串焼き肉とかジャンジャン丸ごと揚げられる芋っぽいのとか薄焼きパンに色々挟むのとか食べようと思っただのに！

うどんみたいな太い麺類の屋台とか、コロコロ丸い一口大の焼き菓子とか、目移りするほど食べ物屋台は豊富だ。なのに、初っ端で満腹してどうする私！

よく考えたら、こちらでの朝ごはん食べたばかりなんだよね。

食事の店はほとんどの店がまだ準備中だったりする。

軽食とか、オヤツ系の屋台がそろそろ稼動といったところ。

完成型が非常に楽しみだ。

それにしても、見事にチェック入れているのが食べ物ばかりだ。いいのか私。

「少し腹ごなしに歩こう。街と祭を案内するよ」

がつくりしている私を見兼ねたのか、ガライア王子が素敵提案を。

いいねいいね。次に食べる物の下見も出来るし、改めて町並み拝見とかもしなくては。途端にニコニコと気分も変えて、さあ行こうとあてずっぽうで進み出す私の手を、ガライア王子が引いた。

「……………何でしょうか、ギリウイ」

ギリウイ。ガライア王子の偽名です。私が名付けました。一文字ずらしただけの単純なもの。  
でも名前ばく聞こえるでしょう。

「ミツネ、はぐれるといけないから手を繋いで行こう」

ミツネ。私の偽名です。

誰も知られていない私でも万一誰かに覚えられていて、後から別の男と仲良くしていたとあつてはマズいと、もんの凄く低い可能性を心配されての事にございます。

ちなみに、フルネーム逆読みの半分を使用しています。え？芸が無い？

いいんです。ひねりも芸も無くたって。聞いてすぐさま美咲と連想するような響きでも無いしね。

ガライア王子の方がよほど凝るようにしないと、バレたら大変な事になるのは必須なんで。

巻き込まれるのは、一切ごめんこうむります。

く~~~~く~~~~く~~~~っ、駄目だあ！

くそう、汗ばむな右手えっ！シモヤケ治してもらった時は、何とも

なかったじゃないか。

うつつ、こここれじゃあまるでガライア王子を意識しちゃってるみたいじゃない。

男の子？人？と、手を繋ぐ事ぐらいしたことあるっつのに。

ガライア王子に手を引かれている最中、意識を逸らそうと屋台を見回そうにも、うまく視点が合わない。

さっき美味しそうな煙りを漂よわせていた何かのお肉を豪快に焼いた香ばしいニオイも気にならない。

ひたすらに右手を握る、自分よりも大きな手が気になってしょうがない。

私はさっきまでいた王宮でのひと時に、思考を持って行き、現実逃避を試みた。

回りの人、ぶつかったら申し訳ありません。

先に謝っておきます。

じゅさん。変装？

こんな体験は人生初めてだなあ。

今日一日で、こんな事を何度思うのか分からないけれど、それを力  
ウントする間もなく次々出来事が押し寄せてただ流されるままにな  
ってるや。

これじゃイカンと思うも、しばらくはここにお邪魔すると決めた事  
は決めたんだし、もうちょい考える時間をくれたらなあ、を心の  
中でため息をし改めて自分の格好を見てみる。

シンプルながらも、可愛い刺しゅうが所々ポイントに入ったワンピース。

丈は膝下で色は若草から淡いピンクのグラデーション。

背中や前で留めるタイプじゃなくて、脇から胸の上にかけて太めの  
紐で編み込むように留める、着にくい、脱ぎにくい民族衣装。でも、  
見た目が可愛い。

紐の結び方にアレンジも色々あるらしい。紐自体の色はエンジで白  
い花模様が織り込まれていて、何て言うか高価そう。

中にダボツとしたズボンを履くらしい。ブーツが基本装備。

ただどファスナーは無いらしくて、紐を一々結ばなければならない  
やつ。っていう出で立ちを、

ジャージ上下の上から着ています…。

いやね？私だつて『はあ？』って思ったよ。袖はゆったりだけど体にはピッタリのデザインだし。  
どんなにか私がスリムさんだったとしても、モッコモコにしかならないよ？つて。

…まあ残念ながら、スリムさんなんかじゃあ無いけどさ。だから、余計に悲惨な事になるじゃないかっ！

ガライア王子に手渡された衣装なんかも、そのまま上から着るという無茶っぷり。

上着とズボンを何とか装着。今の上着より渡された方が丈が短そうなんです。ああほら、ぱつぱつになつてんじゃないですか。

よく袖が入ったもんだ。動けなさそうだけど。

詰め襟のシャツもボタンでなくて紐だから着れたけど、ボタンだったら留められないね。

靴も上からはけと言う。いや、それは無理っしょ。

私だつて、柔らかかシューズを脱がなければブーツは履け無いよ。いくらなんでも…。

「オクナナさーん。祭には行ってみたい気もするよ？きつと楽しいだろうと思うよ。地元民の案内もあるんだし。でもさー

上から着るって、どうよ？二人してゴワゴワモコモコして街を練り歩けて？

いくら顔作っても目立つわ！」

妙に悪目立ち あれ、ガライア王子？ じゃあ隣のが『シエリク』

？ 何あの格好。私の方が『シエリク』に相応しいわっ（大勢の乙女達） 大混乱

なんて事になるじゃないかっ！

ああ、恐ろしい。

祭を楽しむなんて、出来る訳ないよ！色んな意味で。

そもそもこんな格好で出歩きたくないです。

無茶を言う理由を納得出来るよう、ぜひ教えてほしい。

ここまで言うこと素直に聞いて、モコモコになった私達の精神的苦痛を和らげる為にも。

「うー、やっぱり靴の二重履きは無理かー。仕方ない。えいやっ！」

オクナナさんが両手（前足？）を振り上げると、尖った爪の先から光る粉みたいなものが降り注ぐ。そして、私達の回りをゆっくりと回りながら落ちて消えていった。

「ええと？」

「あれっ？ 気に入らなかつたかな。魔法効果。もっと派手なのがいい？ 虹やら星やら花やら羽やらが、パアツと飛んで華やかなやつ」

「すごく要りません。てか、魔法？」

「じゃーんっ見てみてよ」

どこからか大きな鏡を取り出して、目の前に立て掛けられた。  
：腰の辺りにまるでポケットがそこにあるように手を突っ込んで、引きずり出したように見えたのよーのは気のせいか目の錯覚だろうな。うん。

「…！こ、これが私？」

リアルでこんな事言う事態があるだなんて、思いもしなかつたです。

鏡の中に写ったのは、鮮やかな黄緑色の髪を長く長くお下げにしている、顔立ちは優しげな美少女がビツクリしていた。

見開く瞳はとても濃い緑。お茶か椿の葉っぱの色みたいだ。そつえば、あの緑の姫達は髪は元の色なのかなあ？

あそこまで揃えて、髪を緑に染めなかったのはちょっと意外だ。

服は下にジャージを着ていてモコモコしていた様には見え無くて、ワンピースをすんなり着こなしている。

適当に編んで留めた（ジャージの分だけ量が増して結び切れなかった）紐のアレンジは違うようだ。奇麗に結んである。

……とても自分じゃ出来そうに無いや。

ふと、鏡の中の視線をずらしてギョっとした。

隣がガライア王子では無くなっていたから。

黒いツヤツヤな長髪。を、一本の三編み。長さは腰まで。

眉毛凛々しく、目はキリリと涼しげだ。睨まれてもしたら恐そうなその人も、鏡を見て同じくポカンとしていた。

丈夫そうな素材の上着の上から無理矢理着ていたため、完成がよく分からなかった服もキツチり着こなしている。が、靴は元のままだった。

きつとガライア王子だ。

「どう？これなら周りにバレたりしないよ。あ、靴こっちに替えてね」

いやはや、正に別人。変装する魔法があるのかー。

すっい。

すっいけど、服の上から着込む必要がどこにあるのかね。

理由は、私たちが用意された靴を履くとわかった。  
着る前の姿に戻った、ように見えたから。お互いに。

「要は、この『着ぐるみ』着ている同士は元の姿に見える様にした  
のよ。」

それなのに、下に肌着しか着てなかったらヤバいでしょう?」

「…そーね。悲鳴の一つもあげたくなるやね」

それならそうと、事前に説明があってもいいんじゃないの?と、思  
うのですが。

あと、オクナナさん。ウサギから野良着女神に戻ってますが、よう  
するにオクナナさんも『着ぐるみ』って事なんですね?  
疲れたからもうツッコみませんよ。

じゅし。決定？

改めてよそから見た見た自分達の姿を思い返す。

クレームの付けようの無い美男美女の二人組だ。

お互いは元の姿で見えているのだけど他所から見ると、まるでめかし込んだ観光客。

着ぐるみの人達の衣装は、この国の昔の正装らしい。観光地のコスプレサービスみたいなものか？

ちらほら同じ様な衣装を見掛けない事も無い。

そもそも、今の衣装もどんなのが標準だかよく分からないままだ。

あ、今のところ心配したよりも娘さんの緑率は低いです。

リアルじゃ見たことも無いこの黄緑の髪の色、こっちの世界ならきつと浮かないんだろうな。

すれ違う人の髪は、黒や茶色や赤毛や金髪といった馴染みの…といっても私にはほとんど黒、茶、白くらいしか見たこと無いけど。

それ以外に、セスさんよりも明るい青や、『着ぐるみ』の人より濃い緑や、どこかのマダムの人？よりも鮮やかな紫色とか、さっきのさくらんぼみたいいな真つ赤な髪もあって、すごくカラフル。

さすがに日本じゃこれだけ髪色豊富にはならないだろうけど、もしかしたら多民族な国はこんな風なんだろうか。

肌の色も様々。かつ、ファアリープさんのような獣人もけっこういて、見ていてすごく楽しいんですけど。

さつきすれ違った、ふわっふわのベージュの毛をしたくまどりが効いた狐顔の人に思わずモフりたくなったが、どうにかこうにか踏み

止まれた。

ふーっ、よかつた手を繋いでいて。危ない人になる所だったよ。獣人以外にもたくさん種族がいるって話だけど、それほど分かりやすい特徴が無いのか、はたまた視界の中に居ないのか見つけれない。

お、今の男女。

大人みたいだけど小さくて四等身くらいしかなさそうんだけど、何の種族ですか？って聞いたら失礼かなあ。

あ、お、ちょ、羽生えてる人発見ーっ！

うーわーっ、天使？天使なの？それとも鳥人？

て、思って追いついたら、お顔がお馬さんでした。

……ええと、ペガサス？の獣人とかアリなんですか。

ああつと。ゴメンねーガライア王子、騒がしくって。

あと飛べるんですか？ペガサスの人。

「ここが中央広場だ。祭の目玉となる歴史行列の最終地点はこことなる」

おおきな通りをぐねぐね歩いて、広い場所に出た。

京都ほど四角四角してなくてもいいけど、あんなに遠回りしなくとも。そりゃあ、道中飾り立てられてる町並みは綺麗で楽しかったし、

店もいっぱい見れたけどね。

ステージがあつたり、一段と派手に飾られていたりしている広場は、通り沿いにあつた屋台は途切れている。

振り返つたら、お城が見えた。思っていたよりもさらに大きくて、予想よりも優美な造形をしていた。

高さは他に高い建物が無いのでよく分からないけれど、少なくとも学校よりは断然高い。

都会のビルと比べようにも、よく知らないしなあ。

縦もあるけど横幅がすごくあるから全体が視界にまだ入らないや。こりゃ広すぎつてもんだらう。

屋根は瓦じゃないだらうけど、黒いウロコがあるみたいにキラキラとしている。

同じ素材は外壁にも使われている。壁自体は素材が違いそうな黒で、所々に白い素材。ほとんど黒い巨大な建物：夏、熱吸収してめっちゃくちゃ暑くなりそうな予感がするよ。

こつちに来た時の部屋や、今日からお世話になる部屋がどの辺りにあるやら、もうサツパリ分からないけれど、あの城のどこかにあるんだらうなあ。

けっこ歩いたから広いだらうな、とは思ったけど、一日ではとてもじゃないけど回れないね。こりゃ。

時間が無いと急かされた理由。その一つがわかったのは、王子の側にいるメギイさん達の緑つぶりを真似て間違った方向に猛アピールをする姫達に初恋もまだな私が言うのもナンだけど、いくら全身緑の真似だからって、アレは無いよなあとしみじみ思っていたところ、突然部屋全体に パシッ と乾いた音が響いた時だった。

ん？何じゃいこりゃ。

屋鳴りか怪奇現象か。

「あ、時間切れ。ました」

ぱちぱちとお目々瞬くティナリア姫。んで、何の時間切れなのかな？

ぱんっ、ぱんっ と手を叩くも部屋の色は今度は変わらなかった。

えー、まさか…色変えるのって時間制限あんのかいっ。それならそうと早く言ってよーう。

「これで定着しましたが、宜しいですか？ミサキ様…」

おずおずと、乙女の必殺、上目使いをかまされる。

……ふふ。そんな技が私に効くとも？

ここはビシッとやり直しを要求して七番目だったか八番目のメインがクリーム色とセピアの落ち着いた部屋にしてみらうんだっ。

「いいですよ、ティナリア姫。一個後のフルぴんく部屋よりも」

「ん、へタレ……！」

じゅご。体力不足？

広場では、たくさん集まった年代も種族も様々な人達が陽気な音楽にあわせて踊っている。

ファンタジー世界のダンスデビューがパーティーとかじゃなくて良かった！

あんなもん、素人に踊れるもんじゃないよ。  
特に私なんか無理無理。

一般人が大半と思われる踊り手達は、小さな子供からシニアまで幅広い。

そして、動き自体は簡単なんで何となく私でも参加できてしまっただけ楽しい。

失敗して多少ぶつかってもご愛敬。  
まあ地元の方が、何倍も動きにキレがあっただけよく踊れるのは当たり前前事なんですかガライア王子。

陽気な音楽は当然の生演奏。

本物見たこと無いけど、バグパイプっぽい何本も先のついた抱えるほどでつかい笛みたいのとか、縦長な太鼓だとか、小さな胴体の弦楽器とか、それを巧に操る人の中にふわもこ獣人がいるだとかすごい和むんですアップテンポな曲だけども！  
ふぁんたじーってこういうもんだよね！

…でも、いくら単純な動きだつていつまで続くのかわからない曲に  
ペース配分できません。

上げてる腕がそろそろ限界なんです。

ふるふるしますよ。

中学の頃のフォークダンスよりも、確実な長く踊ってますよそろそ  
ろ下ろしたいな、と。

えー、オクナナさんに施された、人の着ぐるみ。下にはつちりジャ  
ージを着ているし、その下にはカナギさんの冷氣には耐えられな  
かったけれど冬のあったかインナーを着ているんですよ。

二枚重ねで。

あんまり寒げや愛用の腹巻きまでも装備しますよ。冬のぬくぬくは  
シアワセだあね！

まあ、冬は大いにヌクヌクしていたんです。人として。

でもね、外に出て思ったけどもターシエルクつては冬じゃないよ？

小春日和よりも随分あったか。

ぶっっちゃけ あ・つ・い！

激しくは無いけれど、それなりに動き回るには厚着し過ぎなんだよ！魔法がかかった時に中身が見えてしまふなら、見えても差し支えない薄着に着替えてもいいんじゃないかな。たかな女神さまっ。体力が無いのは認めます。

楽しいけど、そろそろギブしていいっすかぶっ倒れる前に。

目でガライア王子に訴える。

ぎぶ・みー・休憩っ！（ぬんっ）

王子だって厚着のハズなんだけど、何の支障も無く涼しそげに見えるのは何なのでしょうね。

スペックの違いですかああそうですか。

たーおれーるぞーと目線で訴えたのが効いたのか、誠に速やかに広場の踊り群から連れ出してくれました。

ありがとうございます。

聞けば一時間は音楽は鳴り続くらいしい。ひい。

踊りたいひとは加わって、疲れたらスツと自由に抜けるのはOKなのだとか。でもね、抜けるの、私ら（正確には私）が最初の気がするのは体力の差ですかー。かー、かー、かー…（エコー）

チートな能力なんて物はいらなからさ、せめてここにいる普通の  
人についてけるくらい体力が欲しいかもです。

シニアな世代の人だって、まだまだ踊れてるんですよ……。

ガライア王子の先導が上手かったのか、こんだけ混んで動き回って  
るのに誰かとひどくぶつかる事も無くスイスイとここまで来れまし  
て。

手、繋ぎ再びは意識の外に、ぼーい！

こんな事でナンですが、この王子サマって何でも出来そうな気すら  
してきましたよ。

当たり前みたいに杵を渡されても臼のフチにぶつける事無くペッタ  
ンペツタン出来そうな。

……面白そうだからって、興味本位で一人補助なしで杵を持たせて  
もらったら、見事に臼のフチにぶつけた事のある人〜。  
はーい。

…あれ？いない？

ちよつと淋しいぞ。

広場にいるひと全員が踊つてる訳じゃなくて

全員がターシエルクの国民つて事でも無くて、外国からの観光客もたくさんいるらしい。

この時期は当然、宿泊施設は満室で観光業は潤うのだそう。

そういや、王様決めるときに出るっつー神様の奢り朝ごはんルマキ。宿のオプションで朝食つけちゃったら、朝から二食たべる事になりやしないかな？

キャンセル出来るのかな？

この広場周辺の宿泊施設は、当然ランクはよいものらしい。それでも、私の泊まる部屋よりも落ちるものらしい。ひいひい。

私なんぞにや過ぎた部屋を宛がわれてますよ……かかる費用は出来るだけ控えておいて欲しいんだけど。

その方が私の庶民ハートにとっても優しい。

そう訴えた所で、『シエリク』として『神の娘』として、これくらいは当たり前ですわ、お義姉様。

なんて言われて……ん？お義姉様？

きのせいかな。キコエマセンヨ。最初はね、不本意ながらもここに居るのは強制された訳だし、お世話してもらうのは当たり前！なんて思ったりもした訳ですよ。チロツと。ほんの、チロツと。

けれど最低でも数ヶ月。

オール世話になりっぱなしってというのは、絶対心苦しくなると思うんだ。

衣食住が手厚く保証されていて、言葉も通じて、一応帰る事が出来るらしくて、おまけに勉強もみてもらえて。

えらく甘くないかい？

うまい話は罨なんじゃ？とか思った方がいいんだろうか。平和ボケボケな日本人として。

まあ、ヨ………げふンゲフン！になれとか無茶言われましたが。

それでも、あの部屋世話されるのが当たり前！になっちゃイカンよね。

トリップものの物語だとしたらつまらない位に何事もなくて……いやいやいや、当事者としては何事も無い方がいいんですが。

どんな衣が保証されてんのか分からないけど、食と住は十分すぎるほど。あの部屋ホテルだったら一泊するだけで、来年貰えるお年玉と小遣い全部足しても全然足りないよきつと。

仮にここで何か収入があつたとしても、それまでにかかった費用共々払えるとはとても思えないや。

恐ろしくて、いくらかかるのかだなんてとても聞けない……。

それ以前に、私の平凡スキルで人様に役に立つよーな、ましてお金貰えるよーな事が出来るとも思えないんですが。

現に、一般の人より体力無いっばいんですが。

やっぱり人選間違えてるよーっつ！

「……ミツネは費用の事など気にするな。こちらが勝手に用意しただけだ。

だが気に入らなくとも、あの部屋は警備に最適だから代わる事は止めて欲しい。当面は、この国の事を学んでいけば早く帰る事が出来ると思う」

ガライア王子、それが心苦しいから言ってるじゃん。

それに王子側としては、帰らないほうがいいんでしょう？

正直に言いますよ。

豪華過ぎる部屋にビビってます。六畳の東向き、景色はやや良好の

私の部屋がすでに懐かしいよ。

あ、そうそう。ここの通貨はネットと言って、さっきのさくらんぼは三ネットだったみたい。

高いか安いかは分からないけど、リンゴのネット五十ゴツという価格は一つ百五十円って所かな？そう考えると、巨大さくらんぼが一つ三百円は安いのかも。ジュースは二ネットから三ネット五十ゴツ。

ガライア王子は聞き慣れない名前の果物の、三ネットジュースを飲んでましたよ。

う。しまった。一口味見させて貰えば良かった…！

百ゴツがネットで、後は桁が上がるだけの十進法バンザイ！な世界。良かった。簡単そうで。

ちなみにここではクレジット払いやチャージ式を内蔵なアクセサリで払う人が大半で、あまり貨幣そのものを見かけない。それこそ、小さなお子様までアクセサリを使ってる。

……私、元の世界でもお財布ケータイとか使った事が無いんですが、コンビニも近所には無いし、そもそも寄らないからチャージ式の会

員カードは持って無い。

使っている現場に行くわした事も無いんだけど、家が田舎だから？

クレジットカードなんて、もちろん持って無い。あれってキャッシュカードとは違うんだよね？

まあキャッシュカードも持ってはいないんですが。一応通帳ならあるよ？

小さな頃からコツコツとお小遣貯めてます。

…近場の学校に自転車通学なもんだから、バスや電車の定期も無い。雨の日だとバス…と言いたいけど、バス停と時刻が微妙な位置で、歩いた方がまだマシだったり。

一応、プリペイドのバスカードなら持ってます。

後、テレカ位なら使った事は……あるな。うん。

ずっと繋いだままのガライヤ王子の左手にある腕輪。

買いたい商品の値札にかざすと、値段と品物の名前を取り込んで、その状態でお店の人の腕輪とくっつけると、会計終了らしい。

ふちよつとした間の抜けた音がしたら会計完了。

お店の人が商品を手渡してくれる。

どんな取引をしたのかが、お互いに履歴が残って小銭でワタワタする事も無くて、使う時に登録した本人の魔法でしか反応しないから、盗まれたとしても使えないらしい。

ただし、再発行の時にチャージしていたお金は返ってこないけれど。

支払いに魔法なんか使うから、私は腕輪持っていないんだよね。

え？拗ねてなんかイマセンヨ。ちーっとも。

でもでも、お金が無いから全部ガライア王子に頼る事になるの  
がいたたまれないっ！

無一文ならぬ、無一ゴツですよ。∴ 語呂わるっ。

せめておやつ代くらい現金で持たせてくれても、いいんじゃないか  
と思うのは贅沢かな？！

じゅろく。緊急事態？

体力の尽きそうなフラフラミサキと、それをフォローするガライア王子が広場から姿を消してもなお鳴り止まない陽気な音楽。

ターシエルクにたくさんの人種がいて、それぞれの特色の音楽はあれど、祭の最初の音楽はいつも同じ。

初代国王に仕えた魔術師が作曲したという多くの楽器を使うその曲。

この曲が終わると本来なら国王の挨拶が始まるのだが、今年は体調が思わしくないのだという事は、国民皆が知っている。

ならば、今朝『ルマキ』が現れたのだから、次期国王になると守り神様に認められた第一王子のガライアが挨拶をするのだらうと、高揚感に包まれながらワクワクと人々は踊り続けた。

はい、ミツネ（偽名）です。

ただ今、トイレ（有料）に籠っています。

お食事中の方がいたならすみません。

ええもう何度も言いますが、使うのにお金がかかるトイレも人生初めてですよ！

日本はサービスいいんだなーって思ってしまった。ここじゃこれが標準なのだとか。

まあ、日本にだってどこかにはあるんだろうけど。有料トイレ。

大した金額じゃない十ゴツですが、お金がかかっているだけ『一部の観光地のトイレ』みたいにはならず清潔ピカピカですよ。

誰がピカピカにするって、魔法ですってよ。すげえ。

あ、さすがに消音魔法はかかりませんでした。

ウケると思うんだけどなー。料金あがるか。

……ガライア王子いなきゃ、トイレにも行けない自分が情けない。

さてさて、籠っていると聞いたのには訳があります。

好きで長居してるんじゃないやありませんよ。いくら清潔にしてあっても場所が場所。

しゅ~~~~ぬ~~~~ぬ~~~~ん~~~~。

ガチャ。

「ガ……ギリウイ……」

困り果てて、結局ガライア王子の手を煩わしてしまう選択をしてしまおう。

ああもう、何でこんな事も出来ないんだ私は！  
本気で役立たずだぞ。

「どうした、ミサ……ミツネ」

時々偽名間違えていませんか？別にいいけどさ。気にしてる人なんか誰もいないだろうし。てか自分で名付けといて、私の方も間違えて呼んでやしてないかと記憶力が寂しいのに心配になる。  
こちらも誰も気にしないだろうけど、自分でつけといてソレかと情けない気分になれます。

まあいい。そんな事は。  
今は重要な事が他にある。

「服、脱ぎ方分からないんですが……」

ビシッと固まる王子さま。

うんごめん。

幼児みたいだね…それも、入園前。

言い訳させてもらうと、これって魔法で着たじゃない？

何となく羽織って適当に紐で留めただけで、最初から最後まで手順をふんで自分できちんと着ていない。

というのはある。

上に着た長い丈のワンピースを捲りあげて、余裕のある（レギンスみたいなタイプじゃない。もちろんそんなの下にジャージなんか穿けないよ）ズボンを下ろせば良いだけの話だったはずだった。

ハズだった！

なのに、分けて着たはずの二つが仲良くくっついていて、下ろせなかったのですよ。

ん？

おかしいと思って上体を捻り、腰を確認。

くいくい。

ズボンを引っ張ると、縫い付けた訳でも無いのにワンピースが引っ張られる。

何だこの一体感。

ぐいーっ

強く引っ張っても、どうにもならない。  
どうなってんの？

くいー。

ブーツにしまい込んだズボンの裾も引っ張ってみる。  
これも外れない。

おやー？

仕組みがサツパリ分からない。  
試しに着るときは適当に結んだだけで、魔法完成後は素晴らしく複雑な結ばれ方になっていた、ワンピースを留める紐を引っ張ってみる。

ぐいーっ…

その形のまま、コサージュにでもしたかのように、解けなかった。

はいお手上げバンザイ手に負えない。

って事で、同じく魔法のかかったガライア王子に聞いてみる。  
元々こういう服って可能性も…あるのかなあ？

これこれこういう状態なんですけどと説明。

何だかこちらを見ないで、視線があさってなガライア王子。

「そうか…私には、元の姿にしか見えないので、紐がどの様になっているのかさえ分からないのだがな」

と、自分の上着に手をかけ…なくてエア―上着に手をかける。ようやく私には見えた。

同じく紐を引つ張っているようだけど、はたから見ればパントマイムの様なんですが。

あ、さっきまでの私がそうか！でも個室でやったから誰も見てません！

パタパタと上着の裾をはためかせ、そでを捲った動きをしてみせ

「脱げない」

と判断した私達。

あのう、こういう事態は想定内なんですカー神様。  
そういや『着ぐるみ』とか言ってたっけ？

じゃあ一体型なのは仕様ですか？  
魔法解くまでこのまんま？

てか、ガライア王子にはターシエルク衣装の美少女じゃなくて、百パーセント庶民の平凡高校生がジャージではしゃいでいたように見えていた訳で……。

うわああああん、何か申し訳無いっ！  
お隣りが私ですいません！

「ミツネ？何を謝るんだ」

うう、せめてジャージ上下で無かったなら少しはマシなこの状況。  
他からは着ぐるみ美少女状態に見えていても、いたたまれな〜い！

「いえね、何もこんな格好でお祭りに繰り出さなくてもいいじゃないかな  
いかー、なんて気づいちゃったんですよ」

「ん？こんな格好とはどういう事だ？動きやすそうでもいいと思っぞ」

ふふ、ここで『似合っている』と言わない辺りがさすがですね。  
てっきり言われると思っちゃいました。

「そうだな。色はもつと明るい方がいいだろうな」

エンジ色より明るい色…赤系統はこれ以外ほとんど持って無いよ。黒と白と青ばかり。たまに弟のお下がり。

あんまり衣装持ちではありませぬ。

てか、こういう会話はティナリア姫かメギイさん達とするもんじゃないよ。かり思っていましたよ。

ドレスの着せ替え人形になるのは勘弁願いたいので、ここで服の会話しとくのは今後のイベント予防になるのかな。

「それにしても、このままでは困るだろう。

今日は帰り、魔法を調整するでしょう。

…中に着込む服もな」

はい、賛成です。

こうして私の異世界生活の一日目、初の外出は、正味二時間ちよいで幕を閉じたのだった。

帰りは、行きと同じく転送魔法。

城に気軽に出入り出来る立場ではないのと、移動時間短縮のために持たされた道具を発動させる。

当然、ワープも人生初ですよ。  
や、こんな事体験済みな人も普通じゃないか。

でも、良かった。

ガライア王子と逸れてトラブルに巻き込まれたり、逸れなくてもトラブルに巻き込まれたりしなくって。

事前に言っておけば、回避出来るんだよね！

あれ？違ってたっけ？

緩やかな振動と、浮き上がるような感覚に、いよいよ転送魔法が発動させるって時に、広場の方から腹に響くような歓声があがった。

ひとけの無い路地裏から、私たちの姿が誰にも知られずに消えたのはその瞬間。

その時、始まりの踊りが終わり、国王代理で宰相さまから

ガライア王子が『守り神』様を呼び出しに成功、及び『神の娘』が

現れて『シエリク』が決まった事が発表されていたのであった。

うん、カナギさん達に『シエリク』っていうのはまだ保留にしておいてって伝えたけれど、肝心のティナリア姫とガーナム王子にはそういう言っただけじゃなかったっけかあはははは。

ダメダメですな！私っ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0774p/>

---

将来は王妃様？ 連載

2011年7月9日11時49分発行